

日常を取り戻したい主人公たちがおくる。一つの世界。(艦これ)

空色 輝羅李

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公○である柊龍夜。彼は、色々なわけがあって、この世界へと飛ばされることになった。そんな中、勢いだけでどんどん進む彼と、それを支える艦娘たち。

そんな姿を、ぜひ時間を浪費したい方だけがご覧ください。

内容は薄いです。結構意味わかんないこと多いです。読むなら強めの精神をお持ちになってください（提案）。

目次

第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
90	86	77	62	55	46	39	28	13	8	1

## 第1話

第十話くはじめまして。異世界人ですく

柘龍夜「…ん… ついたのか… って、誰か倒れてる？」

??? 「う… だれ… か…」

柘龍夜「流石に見過ごせないな。大丈夫ですか？お兄さん」

??? 「きみ… は？」

柘龍夜「… 僕の名前は柘龍夜。初めまして。」

??? 「そうか… すまないが、病院へ… 連れて行ってくれないか？」

柘龍夜「その必要はありません。「リジェネーション」」

??? 「何を… している？」

柘龍夜「直しています。魔法で。」

??? 「… そうか。」

柘龍夜「あの、差し支えなければ、名前を教えてくださいませんか？」

??? 「すまないが、それはできない。だが、職業なら。」

柘龍夜「では、お願いします。」

??? 「私は、元帥として、艦隊司令部大本営に所属している。」

柘龍夜「そうでしたか。海軍の… あの、僕にどこかの鎮守府で所属できませんか？（じゃないと、きつとなにもできない…）」

元帥「うーん… 出来ないこともないが、子供にとっては大変だ。それでも？」

柘龍夜「はい、お願いできますか？」

元帥「わかった。では、私が所属している大本営へと案内いたそう。」

このひと、若い見た目してんのに、ちょっと年寄りっぽい。やはり、職柄も関係すんのかもな。

くく少年移動中くく

元帥「ようこそ… といっても、直ぐに鎮守府にいらしてもらうんだがね。」

柊龍夜「なぜ、ここに？」

元帥「それはな、私を助けてくれたお礼… といつては難だが、好きな艦娘を選んでほしいんだ。」

柊龍夜「本当ですか!？」

元帥「ああ。だが、どんな娘がいるか知らないだろうか？だからまずはせめて「天龍を」… 知っていたんだね。」

まずい。ここで魔法について聞かれるとおもったが、この人たちは不思議なことに慣れていているようだ。いま、俺が異世界からきた。なんていつたらまずいな…

柊龍夜「ええ。なんせ、深海凄艦に対しての唯一の希望。それを知らないはず無いでしょう？」

元帥「それもそうだな。わかった。では天龍を呼んでくる。すこし待っていてくれ。」

柊龍夜「分かりました。」

本当は、駆逐のほうがいいのかもしれないが、俺は天龍が好きだから… ここは譲れません（）

元帥「すまない、待たせてしまった。知っているかもしれないが、紹介しよう。天龍だ。」

天龍「ふーん。このちんちくりんが、オレの新しい提督かよ。」

柊龍夜「よろしく頼む、天龍。俺の名は柊龍夜。」

天龍「ま、いいけどよ。よろしくな。」

元帥「早速だが、君には宿毛湾白地にいつてもらいたい。先日、そこにいた仲間が… な。」

柊龍夜「… そうですか。わかりました。」

元帥「頼んだ。なにかあれば連絡をくれ。できる限り力添えする。」  
柊龍夜「感謝します。では。」

そういや、船… まして海なんて初めて見る。あ、引きこもりだったわけではない。むしろ外で過ごす方が多かった。

くく船に揺られて少年移動中くく

俺はここにきて思わずおお。といつてしまった。なんせ、建物が大きいなの。慣れていない人は、入ってすぐ迷うことだろう。

天龍「おい、提督。ぼさつとすんじやねえよ。ほら、さつさといくぞ。」

それもそうだと、俺たちは、中へ入っていった。

柊龍夜「なあ天龍。まずは建造をしてから出撃してほしいんだが、いいかな。」

天龍「別にいいけど、場所わかんのか？」

柊龍夜「いや。教えてほしいと、遠回しにいったつもりだが、くどかったか。」

天龍は、この言葉を聞いたのち、呆れながら案内してくれた。ほんとかわいい。

天龍「ほら、提督。ここだ。やり方は… これを見ながらだ。」

柊龍夜「ありがとう。あと、今更だが、俺のことは下の名前で呼んでほしい。」

天龍「… 別に、いいんだが、なんで？」

柊龍夜「そんなこと聞かないでくれ。恥ずかしい。」

天龍「なんでだよ…」

柊龍夜「と、そんなことはおいといて、建造開始！… 六時間… だと… ー！」

なんとということだ。これは、翔鶴型の時間！俺の運はお亡くなりになりましたってことにならんでくれよ。

天龍「なあ、高速建造使わねえのか？」

柊龍夜「使うよ。いわれなくても。ポイっと」

ピカー！

柊龍夜「まぶいな。うん、まぶい。」

??「翔鶴型航空母艦1番艦、翔鶴です。よろしくお願ひしますね。」

柊龍夜「ああ。よろしく。」

まずい。何がまずいって、最初の資材は、多めにもらった。だが、こんなの、艦隊をうまく回せるだろうか。

まあ、努力するしかねえ。

翔鶴「どうかしましたか？提督。」

柊龍夜「いや。何もない。あと、俺のことは龍夜か、龍と呼んでく

れ。提督というのはなんだか慣れなくって。」

翔鶴「わかりました。龍さん。」

まさかのさんづけ：： 仕方ないか。これから打ち解けたらいいだけ。

天龍「ほら、リュウヤ、出撃だろ？」

柊龍夜「ああ。行ってきてくれ。天龍、翔鶴。」

二人「はいよ」「わかりました」

柊龍夜「：： はあ、今の内に中を見て回るかなあ。」

てなわけで、この鎮守府：： だっけ？のなかを把握しようと思う。

柊龍夜「まずは：： 食堂かな。いったい誰が：：」

シーン…

柊龍夜「ま、いねえよなあ。せめて妖精くらい居てくれたら：：」

あれ。そういえば妖精が見えるのか聞かれなかった：： もしかして、いないのか？

柊龍夜「まさか：： ないよな。」

さらに言えば、間宮さんもない気がする。もとからいるものじゃないのかよ。

柊龍夜「仕事が増える：： 次は、執務室にでも行こう。」

当分は、そこが自室となるのだろうな。と思いながら、執務室へと向かった。

柊龍夜「：： んー。なんていうか、質素だな。家具は揃えるのが大変だから、前の方が残している可能性に賭けていたんだが。」

おそらく、この世界でも家具コインなるものがあるのだろう。集めるのに時間がかかる。

柊龍夜「確かに、子供には大変だなあ：： つと、次はドッグだな。」

流石にドッグは清潔。うん。そうだよ（現実逃避）

柊龍夜「これは、ありがたい。ドッグが：： 四つある。艦隊を回しやすくなる。」

ここは、以前の方に感謝してもしきれないというものだ。そういえば、もうそろそろ天龍たちがかえって来る頃だ。迎えと行こうか。

少年移動中

天龍「艦隊が帰港したぜ。成果はまあまあ、だな。」

柊龍夜「お疲れ様。この調子で海域を広げていってくれ。あと、翔鶴に聞きたいことがあるんだ。」

翔鶴「なんですか？」

柊龍夜「艦載機は、誰が操縦しているんだ？」

翔鶴「妖精さんですが・・・それが？」

柊龍夜「いや、それならいい。ここには誰もいないとおもったが、妖精がいるなら。」

天龍「は？何言ってるんだよ。間宮くらいいるだろう？」

柊龍夜「それが・・・いなかったんだ。」

ここで、俺は天龍たちがいない間のことを話した。

翔鶴「そうでしたか・・・では、もう一回建造してみては？」

柊龍夜「それは・・・不可能ではないが、資材がないだろう。」

天龍「そんなもん、遠征すればいいんじゃないかよ。」

柊龍夜「補給は？」

天龍「拾ったもんで少しずつすりゃあ、少しはもつさ。」

柊龍夜「・・・すまない。天龍たちに負担をかけるようになって。」

翔鶴「しかたないですよ。こんな時だからこそ、協力しないと、ね？」

と、こんなやり取りもあって、二回目の、無茶な建造をすることになった。

俺的には、かなり不安だが、まあ、なんとかなるだろ。

柊龍夜「今残ってる資材は・・・全部820個ずつ。ならば、潜水艦のレシピだな。」

天龍「必ず出るわけじゃねえがな。」

天龍の言う通りだ。だが、可能性があるなら、最善を尽くしたほうがいい。それが今の見解だ。

柊龍夜「時間は・・・二十二分。高確率で潜水艦が来てくれる。」

天龍「運のいいやつだな。」

柊龍夜「当たり前前だ。吸血鬼として、伊達に十二年生きてないよ。」

翔鶴「え・・・吸血鬼・・・？」



柊龍夜「以外か。まあ、見たことないだろうし、当たり前か。」

天龍「アバババ」

柊龍夜「怖がらないでくれ。さすがに傷つく。」

天龍「だってよお、血、吸うんだろお？」

柊龍夜「まあ……じゃないと生きれないから。不便だ。」

結構、本気で不便だ。なんせ血をくれる奴なんてめったにいない。

翔鶴「……飲みますか？私の血」

柊龍夜「……こんなこと初めてだわ……。でも、あとでな。高速建造使うから。」

とまあ、ここでまたまぶしい光が出てくるのは言わずもがな。問題は、どの娘がくるか。

??「こんにちは。伊五十八です。ゴーヤって読んでね！」

柊龍夜「……まじで運がどんどんなくなってるよな……。よろしく。ゴーヤ。」

天龍「……吸血鬼って怖いなあ。」

ここで、潜水艦。ましてやゴーヤとは。神様。俺の運は、どうなってるんすか。

天龍「さ。早速遠征だな。」

ゴーヤ「わーい！初任務だ！」

柊龍夜「翔鶴。単艦で、出撃できるか？」

翔鶴「一応できますが、少し時間はかかります。」

柊龍夜「できるんだ。じゃあ、これを持っておいて。」

翔鶴「これは？」

柊龍夜「結界。」

翔鶴「なんですか？それ。」

柊龍夜「靈力にて、幕を張ったよなものだ。ある程度の被弾なら、艦装の回復もできる。それこそ、数秒に少しづつだが。」

翔鶴「ありがとうございます。この翔鶴、艦隊のため、尽力いたします。」

天龍「おいおい、オレ達にはなしかよ。」

柊龍夜「いや、ゴーヤに持つといてもらう。被弾率が高いしな。」

天龍「…そうか。じゃあ、行ってくる。」

ゴーヤ「行ってきまーす！」

案外と、なんとかなりそうだ。天龍や、翔鶴、ゴーヤが帰る頃は7時を過ぎるだろう。今の内にご飯でも作っとくかな。でも、何がいいだろう…

## 第2話

第十一話く眠気に勝てる訳なかったく

柊龍夜「とりあえず、カレーにするかな。」

なぜ、カレーかだつて？海軍カレーなるものがあるらしいじゃないか。レシピは…生憎知らないもので、一般的なカレーにさせてもらう。使用するスパイスも、簡単なものでいいだろう。えっと確か…さんこうし、カルダモン、クミン、丁字、こしょう、コリアンダー、ニツキ、はつかく、ウコン、唐辛子、ういきょう、メース、ナツメグ…だよな？

柊龍夜「ルーはいいとして、具材…ジャガイモや玉ねぎ、にんじんでいいな。うん。」

海軍カレー？知らないねえ、そんなもの。おいしけりやいいんだよ。偉いひとにやわからないでしょうね！

くく少年料理中くく

柊龍夜「まあまあのお出来かな。喜んでくれるといいなあ。」

そんな独り言をいつているが、今は6時半を過ぎたころ。少し寝かせたかったが、仕方あるまいて。

p r r r

と、黒電話がなったので、速攻で受話器を取った。あまり礼儀はよくないが。

柊龍夜「もしもし、柊です。」

元帥「こんばんは、柊君。調子はどうかな？といつても、初日だが。」

柊龍夜「初日にしてはいいほうです。翔鶴にゴーヤが来ましたし。」

元帥「なんと…！君は、とても運がいいようだな。」

柊龍夜「ははは、ところで、元帥殿は妖精は見えているのでしょうか。」

元帥「ああ。だが、どうして？」

俺は、気にしていたことをふと、聞きたくなり、率直にきいた。元

帥は妖精の存在を知っているようだ。

柊龍夜「いえ、ちよつとした興味です。」

元帥「そうか。では、これからも頑張ってくれ。きるぞ。」

プツツ プー プー と、高い音がした。資材についても言ってきたかったが、明日でもいいかな。

天龍「おーい、帰ってきたぞー」

… あなたは酔ったおじさんですか…

柊龍夜「お帰り、みんな。ご飯はできている。ゆっくり食べてくれ。」

翔鶴「龍さんはいいんですか？」

年下にさん付けをしているとは… やはり、こちらとしても違和感はあるな。

柊龍夜「いや、一緒にいただくよ。」

ゴーヤ「わーい！カレーでち！とてもおいしそう！」

天龍「… これ、お前が作ったのか？」

柊龍夜「そうだが、それが？」

天龍「いや… なんでもない。」

天龍、いくら俺が子供だからといって、なめてくれるなよほんと。

そういえば、さつきから、足元になにかいる気がする。俺より小さい奴はまだいないはずだが…

??? 「ネエ、ボクモタベテイイ？」

… これが、妖精かな？でも、辛いのが食えるかな…

柊龍夜「君は妖精かい？」

妖精「ソウダヨ！ソレガドウカシタノ？」

柊龍夜「いや。でも、辛いもの食べれるか？」

妖精「ウン！ボクタチヨウセイハ、ホトンドナンデモタベレルヨ！」

それはよかった、といい、小さめのお皿にカレールーとご飯をよそい、スプーンに縮小魔法をかけたものを渡した。

柊龍夜「ほら、ゆっくり食べるよ。」

妖精「アリガトウ！テイトクサン！」

お礼を言われて悪い気がするはずもなく、頬を緩ましてしまった。

翔鶴「…！美味しいです！どうやってこれを？」

柊龍夜「滅茶苦茶普通に作った。それと情ってやつ？」

天龍「けつ、くさいなあ。でも、たしかにうまいなこれ。」

くさい…だと？それはカレーがか！それとも俺か！と、考えること数秒…考えるのをあきらめたよ、うん。(思考停止)

ゴーヤ「でもそれって、提督さんがゴーヤたちを思ってくれてるってことでちか？」

おいおい…もう忘れてくれよ…

天龍「ふーん。てことは、年上好きかあ？」ニヤニヤ

柊龍夜「んー…確かに好きだけど…難しいなあ…」

翔鶴「別にいいんじゃないですか？少なくとも私は好きですよ？」

柊龍夜「よーし一回好きの定義をすべて調べようしようしよう。」  
じゃないと、SAN値が危うい。

妖精「オイシイネ！テイトクサン。」

柊龍夜「それはよかった…おかわりもあるけど、食いすぎんなよ。」

妖精「ハイ！」

とりあえず…今日は終わり！…といたいたいところだが、書類仕事が残っている。皆が寝てからになりそうだ。ので、いまから歯磨きして風呂かな。

くく少年移動中くく

柊龍夜「…とりあえず、歯を磨き、風呂に入ろうとした。そこまではいい。そこまでは。でも…」

どうして…どうして風呂が一か所しかねえんだっ！

柊龍夜「でも、よくよく考えたら…メシウマなのか…？」

天龍「普通に考えてそうだろ。ほら、背中流すぜ？」

柊龍夜「…naturalに返答をするなよ／／／」

翔鶴「何を照れているんですか？」

よーしまず胸にてを当てて考えてくれ給えよ！わかるだろ！お前らの【この情報はあなたのクリアランスに開示されていません】が…その…あれなんだよ！とりあえず、湯船に入ろう。体も洗い終わっ

ただし。

柊龍夜「んー！あつたかーい！やつぱお風呂はいいy「ムニユ」…俺はラノベの主人公補正を求めていないぞ。」

ゴーヤ「て、提督さん…ゴーヤの「この情報はあなたのクリアランスに開示されていません」は…やわらかいでちか…？」

天龍「お前…何してんだよ…オレじゃ満足できないのか！」ニヤケナガラワルノリ

翔鶴「私の体じゃ…だめですか？」ビンジョウ

お前からー！悪乗りしてんなあ！頼む、頼むから…

柊龍夜「俺を…休ませてくれ…」ユブネニザブン ブクブクブク

柊龍夜「にやー…にやー！どこだよここ…って、執務室か…ん？」

天龍翔鶴ゴーヤ「スヤスヤ

柊龍夜「…ありがとう。」ゞ（・ω・\*）なでなで

さてと…風呂に入るということで、少しだけ休めた…よなうんそうゆうことにしておこう。うん、仕事しよう。天龍達だけに負担をかける訳にもいかないしな。

柊龍夜「なんだこれ…ああ、任務表ってやつか…とりあえず、半分くらいできていたし…あ、秘書官…よどよどを建造しよう（）」  
といっても、建造で大淀が出てこないことくらい知っている。本当はしたくなかったが…俺が行くしかないな。

何言ってるんだ！そんなことできるはずないだろ！だって？できるんだよなあ。俺なら。フフ！

柊龍夜「さて、翔鶴が頑張りすぎたおかげで、1―6なんて簡単だよ！さあ、殺戮ショー…は嫌だな。」

少年海域移動中

柊龍夜「確かBのマスだよな。さっさと行くか。」

いまサラタウン感があるけど、海域を名称ではなく数字で呼ぶ当たり、めんどくさい名前なのかな。それとも海域名は書いていたけど、俺がすっかり書類を見てないだけかな？まあいい。大淀いたらいい

なあ。

柊龍夜「そう思っていると前方からウオツ、ウオツ… という音が… て逆だろ！」

ヲ級「… オマエハナニヲシテイルンダ？」

柊龍夜「！… こんばんはー… 大淀を探しに来ただけです。何も危害を加えるつもりはありませんよ。」

ヲ級「ウソヲツクナ！」チダラケ

柊龍夜「… 「リジエネーション」

ヲ級「… ナンノマネダ」

柊龍夜「これで信じてくれましたか？（かわいいかわいいかわいい持ち帰りたいよし大淀はあきらめてヲ級を連れて行こう）」

ヲ級「… アリガトウ…」

かわいい。なんだこの生き物… ほんとに深海棲艦かよ。撫でまわしたい。

柊龍夜「なあ、俺と一緒に来てくれるかい？（かわいいかわいいかわいい）」

ヲ級「ドウシテ？ワタシハアナタノテキ…」

柊龍夜「簡単なとき、うちの鎮守府は、戦力不足だからな（かわいいかわいいかわいい）」

ヲ級「ワタシナンカデ… イイナラ」

柊龍夜「かわいいかわいいかわいい（ありがとう。歓迎するよ。）」

ヲ級「エツ／＼／カオマツカ

柊龍夜「おっと、間違えた… とりあえず、帰ろう？」

ヲ級「… ウン」

とまあ、こんなことがあつて、深海棲艦を仲間にすることができた。ほんとに可愛いよヲ級は。

### 第3話

第12話（遠いけど）隣の鎮守府は青く見える

…とりあえず、あの後普通によどよどは捕まえた…捕まえたんじゃないくて、保護した。

その時の反応は…よどよどの名誉に関わるのでね。  
で、可愛い反応をしたのち、

大淀「あなたのような方が提督を…軍の方々はなにをしているでしょうか…。」

柊龍夜「そうかい？こんな時こそ、俺のようなガキが使われるんだろうに。」

大淀「そ、そのようなつもりで言ったつもりでは…！」

柊龍夜「ハハ、少しカマをかけただけさ。大淀はかわいいな。」

大淀「か、かわ／＼／…コホン、それより、どうしてここには深海棲艦がいるんですか!!」

柊龍夜「んー…可愛かったから。」

大淀「…あなたが心配です。沢山の女性をたぶらかしているそうです。」

柊龍夜「そんなことはしていないさ、ただ、正直に言っているだけだよ。」

大淀「…天然のたらしでしたか…。」

柊龍夜「たらしって…とりあえず今日は寝な。夜も遅いし（ほとんど俺のせいだ

が…）」

大淀「いえ、ご心配なく。あなただけに仕事を一任しては、あなたが私を探してくれた意味がありません。」

柊龍夜「そ、そう…あ、俺のことは、龍か龍夜って呼んでほしいんだが。」

大淀「分かりました、リュウス「さん付けNG!」…リュウ。」



柘龍夜「うん。それでいいんだそれで。」

とまあこんな感じ。大淀には無理にでもさん付けさせたくなかった。この会話の後、よどよどは仕事をしてはくれた。それも物凄い勢いで。

柘龍夜「…ほんとすごいな、よどよど。大淀は。」

大淀「…？あ、ありがとうございます。ですが、このくらい当然のことです。ここには

やるべきことが沢山あるので！」フンス

そのとき、ため息のような…尊敬の意を込めた息が出てしまった。なんとというか、驚きすぎてほかにどうすればよかったのか…。

柘龍夜「な、なあ。ほんとに無理はしなくていいからな？睡眠も大事だからさ。」

大淀「…リユウは、やさしいですね。他の鎮守府の方に見習ってほしいくらいに。」

そうかなあと、おれは思いつつ、よどよどが俺のことを名前で呼ぶことに違和感を感じた…今更だが。

大淀「…ですが、言われてみればそうですね。睡眠も必要です。ではおやすみなさい。」

柘龍夜「ん？ああ、おやすみ。しっかり寝ろよお」オオキナアクビ  
シナガラ

流星に俺だつて眠い。なので、お休みさせていただき…ません。よどよどのしごとっぷりにあつけからんとしていたが、驚く事なかれよ！なんと、ある程度分けてくれているではあくりませんか！さ、仕事仕事…ねみい。

柘龍夜「(報告書)…確認した後印鑑だな。で、資材の使用履歴…かな？は適当にグラフに直して管理…ドッグかこれ？使用状況…へえ、艷装だけを入れるんだな。アニメとか二次創作のものでは風呂のように入っていたが…ん〜！終わった！」ノビ〜

後は寝るだけ。今度こそおやすみなさい。

〜少年少女睡眠中〜

——翌朝——

天龍「起きろー！リュウ、さっさと出撃だ！」

柊龍夜「ん。いわれなくとも準備している。好きなだけぶつ放すといい。」

天龍「サンキュー！んじや、出撃するぜ！」

… えらく好戦的だな。と、驚いていると。

翔鶴「あ、あの、私達も行ってきましたね？」

柊龍夜「オツケー。気を付けて行ってくれ。無理だと思えばすぐ引き返すように。」

ゴーヤ「わかってるでち！いつてきまーす！」

相変わらず威勢のいい奴だ。と皆を見送っていると、

大淀「さ、今日も一日任せてくださいね。」

柊龍夜「はいよ。つと、その前に…。」

日課にはいけないが、ヲ級に声をかけなければ。

ヲ級の部屋前。

コンコン、ハイルゾー。 ガチャ

ヲ級「アツ…。」

柊龍夜「起きてる起きてるよかった俺はそれ以外何も見ていないから気にするなあと飯はあるから一緒に食うぞ。皆食い終わるとすぐいきやがったからなじゃ。」ドアバタン

ヲ級「… ミ、ミラレタ／＼／」

なぜ、なぜ着替えていたんだ！もう少し間をおいて開ければよかつただけじゃないか！着替えなんてどこにあんだよ！意外と… おつきかった… じゃなくて！

柊龍夜「… 今日も厄日かな…。」

大淀「？どうかされたんですか？」

柊龍夜「いや、なにも。とりあえず、飯食ってから仕事にしないか？大淀。」

大淀「それもそうですね。腹が減ってはなんとやら。では、お先に！」

柊龍夜「あっ…早!!」

早歩きにしても…やはり早い。

くく食堂くく

柊、ヲ級、大淀「二いただきます!」

今日は、みそ汁にご飯、それからポテトサラダにさせてもらった。作り慣れてはいるものの、やはり時間はかかる。世の旦那さん方、奥さんの大変さを、わかってあげてくださいいね?

ヲ級「ナニコレ…オイシイ…!」パアア

柊龍夜「それは何より(かわいいかわいいかわいい)」

大淀「…まさか、こんな日が来るとは…」

柊龍夜「世の中、長生きするもんだね。」

大淀「なにお年寄りの方みたいなことを言ってるんですか?」

ヲ級「オカワリ…アル?」

柊龍夜「かわいいかわいいかわいい(ああ、たくさんあるぞ)。」

ヲ級「アウ…／／」テレテレ

大淀「…イチャイチャしないでもらえますか?」

柊龍夜「ん?ああ…大淀も可愛いよ?」

大淀「な、なんでそうなるんですか!／／」

ヲ級「モグモグ」

… なんとというか、和むな。二人といると。でも、からかいすぎるのはよくないな。これからもしましょう( )

—— 執務室 ——

柊龍夜「よし、元帥さんに電話を…迷惑かなあ。」

p r r r

きた!電話だ!と、犬のように飛ぶようにして受話器を取った。何してんだ俺…

元帥「…相変わらず、電話を取るのが早いね。」

柊龍夜「し、失礼しました。で、何の御用ですか?」

元帥「いやなに、演習の提案をしようと思ってね。相手は…」

柊龍夜「呉鎮が近いですね、おそらく。」

元帥「そうだったな。では、呉の者に頼んでおくよ。時間は…ヒトヨンマルマルで。」

柊龍夜「…？何時ですかそれは。」

元帥「おっと、すまない。十四時丁度だ。」

柊龍夜「ありがとうございます。では。」

元帥「ああ… あ、あと。」

柊龍夜「…なんでしよう？」

元帥「うちから、雲龍を… どうだ？」

柊龍夜「(空母)… いっぱいいるけど… 個人的に好きだしなあ….)… ありがたく運用させていただきます… でいいんですね。」

元帥「ま、まあ… 彼女たちは所謂兵器だから… でも… どうだろう。」

柊龍夜「すみません、変なことをいって。では、雲龍を楽しみにしています。たくさん資材ももちろんね？」

元帥「わ、わかっているさ。君はすごいな。まだ若いのに。」

柊龍夜「ありがとうございます。ですが、元帥殿もまだ若いでしょう？つと、よどよどが怒るので切らせてもらいます。では。」

と、少々強引に切った。向こうにだってしごとはあるだろうから。でだ…

大淀「… どうして、元帥である方とお話を？」

柊龍夜「… かくかくしかじか。」

大淀「… 私には難しいですね、あなたとの意思疎通が。」

柊龍夜「き、嫌いにならないで!!」

大淀「冗談ですよ。でも、そうでしたか。」

え？まじでわかるの!?!…

大淀「では、仕事を始めますね！ていと… リユウは休んでてくださいー!」

柊龍夜「… 無理はしなくていいからな？」

ヲ級「… ソウ… ダヨ？」

大淀「…わかりました。」

その間に、天龍達にも演習の連絡をしなくては。あと、ヲ級に装備も開発しなくては。

柊龍夜「あれ？そういえば…一応大淀が今は秘書官だよな？」

大淀「？ええ、そうですが。」

柊龍夜「…艦上偵察機を作りたいから、どうすればヲ級を秘書官にできる？」

大淀「えと…とりあえずは、一緒に開発をした方の艦種によるので、大丈夫ですよ？」

柊龍夜「よかった。ではヲ級。いこう？」

ヲ級「？…ワカッタ」

少年少女移動中

柊龍夜「さて、ここに開発資材が、三十二個。あるだろ？これをすべて使う覚悟で！」

ヲ級「…ワタシハ…ナニヲスレバイイ？」

柊龍夜「いてくれるだけでいい。それだけでも心強い。」

ヲ級「…ワカッタ…」

柊龍夜「さて！開発理論値は確か…彩雲は燃料二十、ボーキ百十で、瑞雲は燃料二十、弾薬三十、ボーキ五十…何回回すだろう…」結果だけ言おう…両方一回でできた。俺…どうなるんだろう。柊龍夜「…つ、ついでに艦爆も。彗星一二型甲は…流石にウン十回だろ？さ、気合！入れて！回します！」

そしたらなんと…！三回め。怖い怖い。フフ怖。

ヲ級「…ドウシタノ？」クビカシゲ

柊龍夜「ん？何でもないさ。よし、戻ろう。」

ヲ級「……ウン。」

少年少女またも移動中

大淀「どうでしたか？」

なんとというか、言い辛い。あのあと、こつそり雲龍の分も開発したら、三回だけですべてがそろった。これを気持ち悪いといわずしてなんと言おうか。

柊龍夜「まあまああってとこかな…ハハ。」

ヲ級「ソウナノ？アンナニオドル「それよりも！」…アウ…」

柊龍夜「どれくらい終わったんだい？」

大淀「えっと、その…全部です。」

柊龍夜「俺の分が！…じゃなくてありがとうございます。助かるよ。」

大淀「いえ、このくらい当然です！」ムネハリ

柊龍夜「お疲れ様。」ナデナデ

大淀「はう：／／／」

ヲ級「ワ、ワタシモ…！」

柊龍夜「ええ…別にいいけど。」ナデナデ

ヲ級「…キモチイ：／／／」

二人とも幸せそうな顔しやがって！かわいいなあ。つて。もう昼じゃないか。

柊龍夜「みんなが帰ってくるな。その前にご飯の用意をしなければ！」

大淀「私も手伝います。」

柊龍夜「ありがとう。でも、仕事で疲れただろう？少し休んだほうがいいよ。」

大淀「…では、お言葉に甘えて…」

てなわけでいい感じに食事の準備を始めますか！

くく少年（ryくく

さて！お昼は何にするか…ん？あれは妖精さん！何食べたいか聞かなくては。

柊龍夜「おーい、妖精さん！」

妖精「！テイトクサン！ドウカシタノ？」

柊龍夜「なに、大したことじゃない。お昼何食べたいか聞こうと思つて。」

妖精「ンー、ナンデモイイヨ！」

柊龍夜「…それは困ったな…仕方ない、その辺にいたカジキをいただこう。」

妖精「オサシミ？オイシソウ！デモ、タイヘンデシヨ？」

柊龍夜「大丈夫さ。近くの漁師さんに頼んで、もう捌いてもらつて  
るよ。」

妖精「ソウナンダ！ジュンビガイイネ、テイトクサン！」

なんだこの生き物…。可愛いな。でも、刺身だけでは味気がない。  
それに、演習前だというのに、栄養が取れないのであれば本末転倒だ。  
他には…

柊龍夜「そうだ、卵焼きとから揚げ。あとご飯炊いときや大丈夫だ  
ろ！」

妖精「テイトクサン、マダワカイノニスゴイネ！」

柊龍夜「そう？ありがとう。」ナデナデ

妖精「エヘヘ！アリガトウ！」

んでまあ、準備が終わるころに丁度帰ってきた。今は、午後一時ご  
ろ。あと一時間…。一時間！早く準備しないと！

天龍「んな慌てんなよ。ゆっくりでも間に合うさ。」

翔鶴「そうですよ。急がば回れ、てね。」

ゴーヤ「そうでち！それに、演習相手は逃げないでち！」

ヲ級「ゴハン…。オイシイ…」

大淀「…。皆さん、少しは焦りをですね…。？」

こんな、ゆっくりしたやり取りもあったが、なんとか呉についた。  
どうして間に合ったかって？彼女たち…。早いんだよ。まあ、吸血鬼  
が負けるほどではないがな。

—— 呉鎮 ——

柊龍夜「…。あ、どうもこんにちは。宿毛の鎮守府より参りました。  
柊龍夜です。」

呉T「はあ…。君のような子供がうちのあいてねえ。ま、せいぜい  
簡単にはやられないでくれよ？ハハハ！」

呉の艦娘「エーアンナノガイイテ？ツマンナイ」「コレジャアビツ  
クセブンガデルマクモナイナ！」

柊龍夜「…。そちらの編成は誰でしょう。」

呉T「ん？ああ、伊勢に日向、加賀に千歳、浜風と雪風だ。」

柊龍夜「はあ、そうですか。おい、皆。こいつらをつぶす覚悟でいけ。どうせ練習弾だ。構わず…壊していいぜ…！」

皆「ワカリマシタ」「アイヨ！」「マカセテクダサイ」「ワカッテルデチ！」「カクゴハ…モテル。」

呉T「この…！おい！本気で勝てよ!!」  
結果発表!…

圧倒的大勝利!当たり前だ。あんな屑な連中に負ける訳がない。

呉T「…申し訳ありませんでした。お詫びに、うちの装備全部持つて行つてください。」

柊龍夜「では、ありがたくお受け取りいたします(うわまじかよ、ラッキング報酬と任務報酬の装備全部あるじゃん)。これからも、よろしくお願いしますね?」ニコオ

呉T「ハ、ハイ…」ガクブル

あのひと面白すぎて、帰りに皆で爆笑してしまった。人としては俺のほうが酷いのかも…。とりま!呉を後にした俺たちは、帰つてみて驚くことが一つあった。それは…

——宿毛湾白地——

雲龍「…あなたが…提督?」

柊龍夜「あ、ああそうだ。よろしく。うんにゆじやなくて雲龍。」

雲龍「…今あなた失礼なこと言おうとしたでしょ…?」

柊龍夜「何のことでしょう。」アセアセ

雲龍「…まあいいわ。艦載機さえ充実させてくれれば…いろいろしてあげる。」

柊龍夜「…本当にいいんだな?」

雲龍「?...ええ。」

さつき、呉の人にもらった艦載機を見せた。あと、開発した艦載機も。

雲龍「す、すごい…!これ全部…?」

柊龍夜「まあ、装備できる最低限を選んで使つてくれ。ほかにも空母はいるからな。」

雲龍「ありがとう…!あなたになら何でもされていいわ…!」



柊龍夜「そ、そう。」

翔鶴「… 浮気ですか？」

柊龍夜「なんでだよ…。」

天龍「お前にはおれで十分だろ？」ワライナガラ

柊龍夜「… 疲れたなあ。」

雲龍「なら、私が癒してあげる…。」

柊龍夜「は？なにいつてr」

話を遮られた… のみならず、俺の顔はなぜか雲龍の、えつと… 胸にあつた。

雲龍「… どう？」

柊龍夜「いや、どうって… / / /」ミミマツカ

天龍「お前… そこ変われよ！それは初期艦の務めだろ！」

翔鶴「いえ、それは違います。提督を癒す？のは幸運艦である私の役目です。」

ゴーヤ「… よくわからないでちが、とりあえず私のやくめでち！」

ヲ級「… ワタシノ… ヤクメ / / /」

大淀「モテてますね、提督。ですが、これは秘書艦である私の役目ですよね！」

みなさん… 真面目に言わないで！まだ出会って間もないでしょ！?

柊龍夜「… それより、飯作るからどけ。毒入れてほしくないならな。」

天龍「そ、それはないだろ…。」

ヲ級「… アナタガツクルモノナラ… ナンデモイタダクワ…」  
いや冗談だよ？毒持ってないし。持ってもお前らすkじゃなくて愛してるからできないんだよ。わかれよ！ ( )

柊龍夜「どうか、晩飯は何作ろう…。」

雲龍「じゃあ… 生姜焼きは？」

翔鶴「いいですね！提督、お願いできますか!？」

柊龍夜「え？ああ。いいけど。」

案外肉食系（意味深）なんだな。え？なんで意味深をここにつけた

か？特に意味は・・・ない！

柊龍夜「じゃあ俺は、生姜と豚肉でも買ってくるか・・・誰かついてきて？」

雲龍「じゃあ私が。」

柊龍夜「わかった。いこうか。」

少年少女移動中

——鎮守府外のとある町——

柊龍夜「・・・（ここって確か、比較的治安の悪いところだよな。怖い。）」

雲龍「くく♪♪」

柊龍夜「！（なんて楽しそうなんだ!!服を買ってもらう前のJKかきさんは!!）」

雲龍「まずはここね。生姜はなるべく大きいのを3つつ。」

柊龍夜「3つつも？そんなに食べるのか・・・」

八百屋の方「へいらつしやい！おっ？なんだいなんだい？若いのに軍人さんかえ？いつもありがとうねえ！ほんの気持ちだ、これはタダだよ！」ダイコンサシダシ

柊龍夜「えつでも・・・ありがとうございます、これからもどうかよろしくお願いいたします。」

・・・この世界のひとは優しいねえ。大根とは。ちようどいい。薬味として、おいしくいただきますか！

柊龍夜「次は肉屋か・・・どこにあるんだい？」

雲龍「二つ先の曲がり角を右にいつてちよつとしたらあるわ。」

柊龍夜「そうか。ありがとう。（偉く具体的だ・・・）」

まあ、二つ先つてのが、ちよつと距離があるのでね。談笑しようとした矢先・・・

チンピラー1「おいねえちゃん。いまひまかい？」

雲龍「・・・いいえ。生憎、忙しすぎて、猫の手も借りたいくらいよ。」

チンピラー2「そんなこと言わないでさあ、ちよつと飲もうぜ？な？」

柊龍夜「こんな時間にですか？飲んだくれもいいところですね。」

チンピラー1「ああん！ガキが何ほざいてやがるんだ！引ッ込んでろ

！」

チンピラ2「そうだ！ガキのおまえが出る幕なんぞ、ねえんだよ!!」

柊龍夜「ガキ……ねえ。いいご身分なこと。覚悟はできてるな？」  
ガントバシ

チンピラ1「ケツ！チビがにらんでんじやねえよ！てめえこそ覚悟  
できてんだろうなあ！」

チンピラ2「お前なんかへでもねえ！俺たちに喧嘩を売るなんて、  
相当殺されたいようだなあ！」

柊龍夜「…死ぬ覚悟の無い奴が、殺すなんて簡単に言ってるじゃ  
ねえよ。炎剣「爆破斬」、スキル「炎舞」

チンピラ1, 2「!!なんだこれ……化け物め！」

柊龍夜「悪かったな、化け物……吸血鬼で。」

——雲龍side——

チンピラ1「おいねえちゃん。いまひまかい？」

雲龍「(何この人……お酒臭い……)いいえ。生憎、忙しすぎて、猫の  
手も借りたくらいよ。」

こうゆうことは、私に関してはよくあること。なぜだか男の人は私  
の体目当てでナンパとゆうものをしてくるのだけれど、私にはその気  
持ちがわからない。ほかにもいい女性はたくさんいるはず……と、そ  
んなことを思っていると、提督の音がする。

柊龍夜「——炎剣「爆破斬」、スキル「炎舞」

何事だと、私は驚きながら提督に目を向けた。そこにいたのは、血  
相を変え、剣のような形をした炎を持った、提督だった。かと思えば、  
その炎を振り回していた。ただ、闇雲に振り回すのではなく、今まで  
に何度も刃を持っていたかのような一振り一振りだった。その姿に  
私は……柄でもなく、見惚れてしまった。

雲龍「……大丈夫？」

柊龍夜「……少なくとも、俺はな。こいつらに外傷を与えてはいな  
いが、精神的にはキツ

イことだろう。だが、自業自得だ。」

雲龍「・・・そう・・・」

彼の冷酷さは、確かに酷いものだった。でも、私としては何も思わない。これはこれで彼の個性だから。けれど、周りの目はイタイものだった。彼に対して恐怖を抱くのは少なくとも、わかる。彼は・・・提督であるこの子は「気にしないほうがいい」といつていたが。

柊龍夜「・・・とりま肉、買うか。」

雲龍「・・・そうね。」

——柊side——

・・・肉買って帰った。ただ、それだけ。周りの目は覚めていた。至極当然の結果だった。

・・・鎮守府・・・

柊龍夜「ただいまー。」

雲龍「ただいま。」

妖精「オカエリ！ジュンビハデキテルヨー！」

柊龍夜「用意周到ってこのことか・・・」

雲龍「・・・妖精さんは案外出来過ぎなのよ？」

柊龍夜「じゃあ、雲龍にも手伝ってもらうかな。」

雲龍「・・・任せて・・・料理はそこそこ・・・」

・・・生姜焼きー豚肉ー・・・

下味は、しょうが（しぼり汁）と酒、醤油をそれぞれ大きじ1、これをまぜ、豚肉をつける。そしてラップ等でふたをする。ちなみにつけるときに、豚肉にしっかりと下味がつくようにすること。今は4時半・・・十分だね。今の内にご飯をたく。皆、いい意味で沢山食べるので、八合・・・足りるかな・・・を炊いておく。そしてたれを作ろう。生姜、砂糖、酒を、それぞれ順に大きじ3、大きじ1、小さじ1と二分の一。これを、また混ぜる。これは七人分だが、ご飯は違うので、参考にしないように。

雲龍「・・・すぐく慣れてるのね。」

柊龍夜「そんなでもないさ。」

天龍「おいおい、謙遜なんてすんなよ。」

翔鶴「そうですよ、提督がおつくくりになるものは、すべて美味しいじゃないですか。」

柊龍夜「・・・いうてそんなに作ってもないけどな。」

ゴージャ「でも、事実でち。」

柊龍夜「・・・どの家庭でも作られるようなものしか・・・」

大淀「ですが、あなたの作る食事は、はずれがありません。素直に喜ばれてよいのでは？」

柊龍夜「そうかなあ・・・」

てな感じでだらだらしゃべったら、時も過ぎ、六時ごろ。さあ、飯を食うか！

天龍「うめえな！生姜焼きなんてあんなどこにいたら食えなかったぜ！」

柊龍夜「へえ。ま、喜んでもらえたならうれしいよ。」

ヲ級「オイシイ・・・！」

翔鶴「これは・・・しっかりと生姜のおいがついていて、お肉の味も消えない程度に味が

ついてますね！」

柊龍夜「そんなに褒めても、食後のデザートくらいしかでねえぞ？」

ゴージャ「素直に喜べばいいのに！」

妖精「ダイコンオロシガオニクニアツテルネ！」

柊龍夜「それに関しては、八百屋のおじさんに感謝だな。」

こんなにいるさくも楽しい食事は初めてだ（今まではただうるさいだけだったしね・・・）。とりま、ねぎまじやなくて、とりま。寝る準備を・・・割愛させてね。ハハ

柊龍夜「それでは！夜のお仕事ですよ。大淀、よろしくな。」

大淀「よ、夜のですか？／／／」

柊龍夜「なんか違うよ脳内ピンクめ。」

大淀「の、脳内ピンクって何ですか！」

柊龍夜「そのままの意味だが？」

大淀「そうですか・・・で。執務に関しては、あとは提督に判子を押ししてもらいだけですが・・・」

柊龍夜「そう・・・なの・・・？じゃあ、寝といていいよ。」

大淀「いけません！少しでもお手伝いをさせてください！」

柊龍夜「じゃあ紅茶くれるかい？」

大淀「紅茶ですね？任せてください！」

相変わらず・・・気が利きすぎている。つかれそうだな。でも、とても助かる。さてでは！判子押しますか・・・気が遠くなる。

## 第4話

第13話くく備蓄は減り、仲間が増える…くく

柘龍夜「当然だって? いいじゃないか。」

大淀「…何をおっしゃってるんですか? あ、どうぞ、ダージリンです。」(味はわかるのかしら…)

柘龍夜「お。ありがとう。この時期(設定的に2017年五月一日あたりです)だとおいしいからね!」

大淀「お詳しいのですね! 紅茶はよく嗜まれるのですか?」

(へえ… 案外舌はこえていようですね。少しは楽しめるかしら?)

柘龍夜「(心の中なげえよ) そうだね。ここに来る前からよく飲んでいたよ?」

雲龍「… 紅茶より、日本酒の残草蓬菜ね。」(この子には申し訳ないけれど、美味しいもの)

柘龍夜「残草蓬菜か… アルコールとしては楽しめないが、魔法で分解しているのでな。」

風味だけでしか言えないが、柑橘系の果実を思わせる酸の香りがいいよね(未成年者の飲酒は法により禁止されています。おやめを。あと、成人されている方でも、お体にあつた飲み方をしてください。)

雲龍「あら… わかってるじゃない。今度一緒にどう…?」(飲んだことあつたのね…)

柘龍夜「… まあ、いいけど。(重ね重ね申しますが、未成年の飲酒は法により硬く禁じられています。飲まないでね?)」

大淀「あれ? 提督… もう終わったんですか!」(いくら何でもさすがに…)

柘龍夜「ん? ああ! 終わったよ。だからもう今日は休んでくれ。」

大淀「あ… ああああ…」(だめ… この人は年下なのに… ああ…)

柘龍夜「… (やばいよこいつ。)」

てか、なんで心が読めるんだろうか…。正直突然すぎて、調子が狂うよ…。

柊龍夜「はいはい。さっさと明日に備えて寝なさいな！」

大淀・雲龍「分かりました（わかったわ）」（それに加えて優しい…！）

柊龍夜「…最後に戦艦レシピ回して寝よう。そうしよう。（ひいていいよね…？）」

翌日…

金剛「ヘーイテートク！ワタシは金剛デース！よろしくネー！」（何この提督…子供？）

柊龍夜「子供で悪かったな…。よろしく金剛。今紅茶を淹れるよ。どの茶葉がいい？」

金剛「!?…そうですネー…。ウバ…。ありますカ？」（この提督…デキル！）

柊龍夜「わかった。あれは茶葉の香りが強いが、あの刺激的な味が好きという人が多い」

金剛「オー…。そこまでしてマスか…。今度お茶会シマシヨ？」（茶葉の違いが判るなんて、すごいデース！）

柊龍夜「ほかの金剛型はいないが、それでいいなら楽しもうか！」  
ヲ級「…オハヨウ…」

柊龍夜「おはよう（お！読めない…。読んでみたかったんだが…。）」

金剛「…へ？」（なんで深海棲艦が…？）

柊龍夜「…無理もないか。大丈夫、敵対心はないさ。案外かわいいだろ？」

金剛「そ、そうデスカ…」（なぜでしょう…。敵ではないけど、敵デス…）

大淀「おはようございます、提督。そちらは…。金剛さんですね？よろしく願います」

柊龍夜「…とりあえず、天龍をつれて、1―5へ明石を探しに行つてくれ。」



天龍がいないときに言ってしまったので、少しばかり（本当に少しばかり）、申し訳ないと思ったんだが…起きるのが遅いのが悪いよね？

そんなわけで、天龍を起こすか。寝てるときは服を着てるだろ（フラグにならないでくれ）

柊龍夜「てーんりゅー…返事がないな。入るぞ。」

天龍「へ？あ！ちよ、待って!!」（やばいやばいやばい！寝ぐせ直してないし下着のまま）

まだし！）

柊龍夜「おつと。まだ見てないぜ？目は閉じてるからな。早く起きて来いよ？じゃな。」

天龍「／／／」（なぜか…恥ずかしい…／／／）

何故だ…何故だ!!二度も同じ失態を犯すとは！そんなことを思ってるうちにあつという間に執務室へ戻ってきてしまった。ヲ級に癒してもらおうか…

ヲ級「…ドウシタノ？」

柊龍夜「ん？ああ。少し疲れてさ…膝枕してくんね？」

ヲ級「」

雲龍「」

大淀「」

柊龍夜「えと…」

柊龍夜「」

天龍「よーす…おい？」（寝てんのか？）

柊龍夜「お。来たか。1―5行ってきて。」

天龍「任せときな！ついでにゴーヤも連れて行つとくよ。」（ねみい…）

柊龍夜「他のみんなは…翔鶴が起きてきたら海域広げてきてくれ。どうせまた…いや。何でもない。」

艦娘s「りよー。」

軽いなこいつら… Friendly過ぎるだろう。でも、これでもいいかもな。ガチガチ過ぎてもブラックになるだけだし。

柊龍夜「さて…今日はこちらからするかな？」

prrrrr prrrrr

なんでき…！

柊龍夜「はいもしもし。柊です。」

元帥「おお。柊君、今日も元気そうだね。調子はどうだい？」

柊龍夜「相も変わらず順調ですよ。本日はどういったご用件ですか？」

元帥「ははは、君は勘がいいようだな。いやなに、少し頼まれてほしいんだよ。」

柊龍夜「内容によりけり…なんて言ったらいけませんよね…分かりました。できる限りのことをさせていただきます。」

元帥「そうか。頼もしいことだ。で、その内容だがな？他の鎮守府…所謂ブラック鎮守府に行つて、その提督に喝を入れてほしいんだ。」

柊龍夜「申し訳ありません。そのようなことを何故子供である僕に？」

元帥「んー…経験してもらいたいからかな。それと、同じようにならないでほしいと思うからね。」

柊龍夜「同じように…ですか。分かりました。私に任せてください、そんな輩、肅清して見せますとも。」

元帥「…意味わかつてる？」  
柊龍夜「？もちろんですが。」

元帥「いや。それならいいんだ。とりあえずその鎮守府は、横須賀のほうに…」

柊龍夜「…神奈川まで…今からですか？」

元帥「いや、いつでもいい。だが、なるべく早くしてほしい。」

柊龍夜「いえ、ご心配なく。本日中に終わらせますから。」

元帥「そうか…任せたよ。」

柊龍夜「ありがとうございます。では。」

と、こちらが切る前に電話は切れた。さて…いくか。

大淀「いやいやいや…。どうやって行くんですか？」(流石に神奈川まで一瞬なんて…)

柊龍夜「問題ない。音速以上に早く飛べるんだからな。」

大淀「そうですか…。しばらくはここは任せてくださいね。」(仕事ね!!)

柊龍夜「ああ。任せるよ。」

なんていう、少しの会話を済ましてから、俺は鎮守府をでた。三秒もたたずに。え？ありえないって？物理演算してろよjk(物理演算で求める場合、音速×3くらいが俺の飛行時の速度でやってみそ。まあ、もつと早いんだがな！)

柊龍夜「…。こんにちは、宿毛湾から元帥さんにいわれてこちらへ来ました、柊です。」

横T「そうかい！てめえみたいな子供が来るなんて、世も末だな!!」

どうやら、心は読めないらしい。条件付きか…。それに、若干関西弁だな…。

横T「まあいい。少し案内くらいしてやるよ…。おい！大和!!」

大和「…。はい、分かりました。こちらへ…。」

横T「さっさと終わらせろ、じゃないと…。へへっ！」

柊龍夜「やさしく対応をしてください、減点対象です(とかカマかけるか…。)」

横T「それがどうした！はやくいけ!!」

柊龍夜「…。どうしようもない層だな。」ボソ

大和「！…。行きましようか。」

とって、大和は俺を連れていった。彼女の部屋へ。

柘龍夜「…なぜここ？」

大和「もしも…あれが聞こえていたら、なにされるか分かりませんよ!？」

柘龍夜「構わない。君たちが傷つくほうが嫌だ。といつても、子供っぽさがあふれていてかつこよくはないかな。」

大和「そんなことは…でも、ありがとう。」

柘龍夜「…なあ、ここって所謂ブラック？」

大和「どちらかといえばそうですね。」

柘龍夜「(正直だ…)そうか。で、君は…大和はこれからどうしたい？」

大和「それはどういう…。」

柘龍夜「ここを出たい？残ってこき使われたい？」

大和「話が見えないというか…。」

柘龍夜「それもそうか…えつとね、かくかくしかじか…。」

大和「なるほど。分かりました、大体は。ですが、ほかの方にも聞いたほうが、うまくいくと思いますよ?。」

柘龍夜「そうだね。ほかにだれが?。」

とかいう、ことを会話して…またもかくかくしかじかが通じた!ってそれは違うな。とりあえず案内してもらった。

柘龍夜「…重巡の寮か。」

大和「はい…といつても、二人しかいません。」

柘龍夜「とりあえず、呼んでくれ。」

大和「わかりました。鈴谷さん、摩耶さん、出てきてもらえますか?。」

鈴谷? 「…どうして?。」

大和「宿毛の提督が元帥殿に呼ばれてこちらにいらしたんです。」

摩耶？「なら……いいか。」

柊龍夜「……初めまして、宿毛湾泊地からきた、柊龍夜だ。よろしく。」

鈴谷「こんな子供が軍に……どこもブラックになるの……？」

柊龍夜「まてまて、俺のどこがブラックなんだよ。」

摩耶「お前みたいに、純粹そうな奴が、大人になってみる。周りにながされて、いつしか

ブラックになんだよ。」

柊龍夜「…俺はこの世界に大人になるまでいるつもりはない。そんなことはどうでもよくて……」

鈴谷「じゃあ、何しにこんなところへ？」

柊龍夜「元帥に言われて、こつちの提督肅清しろって。あと、あわよくばその艦娘皆連

れてってやれとき（こんなこと言われてないけど、集まるの時間かかるし、いいでしょ）。」

摩耶「へー、そうかい。んじゃ、私たちのこと、救ってみな。できた暁には、ついてってやるよ。」

鈴谷「私もいいよ。それに、私は少しくらい手伝ってあげなくもないわ！」

柊龍夜「ツンデレかよ……ありがとう。でも、君たちへの負担が大きくなってしまいうからな。大丈夫だよ？」

摩耶「なにかっこつけてんだよ。一人で抱え込むなよな！」

柊龍夜「案外と、乗り気だな。」

鈴谷「そりゃ、こんなとこ早く出たいからね！」

柊龍夜「わかった。できうる限り早くしますよ。」

大和「では、次は戦艦の方たちですね。行きますか？」

柊龍夜「うん、案内よろしく。」

いやあ、案外墮ちるの早いな（ゲス顔）。てゆうバッドジョークは置いて。

柊龍夜「ここが戦艦の子たちの寮……デジャブだな。」

大和「そ、そうですね……ここにいるのは、陸奥さん、榛名さん、ウォースパイトさん、

そして私です。」

柊龍夜「そうか。で、皆を呼ぶ前に。改めて、君はどうしたい？」

大和「わたしですか……わたしは、ついていきます。どこまでも。」

柊龍夜「ありがとう。では、三人を呼んでくれ。」

大和「はい！皆さん、出て来ててください。」

榛名「……聞こえてましたよ？」

柊龍夜「およ？なら、話が早いな。どうしたい？」

陸奥「そうねえ……私についていくわ。あなたがどのような指揮を執るか気になるもの。」

ウォースパイト「meもついていくわ！なにせいまのadmiralには不満しかないの！」

柊龍夜「……そうか。榛名、君は？」

榛名「わ、私は……今のままでは、榛名は大丈夫じゃないです。ので、ついて行ってもよろしいですか!？」

柊龍夜「大歓迎だよ！じゃあ、皆よろしくな。」

……こんな感じで交渉のようなことを次は軽巡のこたちや駆逐のこたち、ほかにもしていくわけだが……短調だよな？でだよ。わかっているだろうが、大淀の様子が気になるなあ（棒）

……大淀side……

大淀「うへ……あのひと、たったひと時といえど、これだけの量を簡単にこなしていた

のですか……流石です！」

ヲ級「……ナニシタライイ？」

大淀「ああ……えっと……この書類を直しておいてもらえますか

？」

ヲ級「ナオス…？ドコヲ？」

大淀「あ。片づけて下さい、でしたね…」

ヲ級「ワカツタ。」

大淀「(つい関西弁が…)でもその前に、こっちの書類の処理を…ん?)」

ヲ級「ソコ…マチガツテル…」

大淀「え…あ！ありがとうございます。」

大淀(文字…読めるのね…)

ヲ級「今、失礼なこと考えたでしょ。」

大淀「…え？」

ヲ級「何よ…私くらい普通にしゃべるわ。」

大淀「あ、えっと、すみません。」

ヲ級「まあいいわ。そこまで鬼じゃないもの。で、ほかに仕事ないの？」

大淀「そうですね…では、本部からの書類を五十音順に並べてください。」

ヲ級「わかった。でも、五十音…あいうえおってやつよね？」

大淀「え、ええ。じゃあこれを。終わったら教えてくださいね。」

十分後…

ヲ級「終わったわ。次は何をすれば？」

大淀「もう終わったんですか…えと、お茶ください。」

ヲ級「任せて…」

大淀(この光景…提督は喜ぶでしょうね。あの人守備範囲広いし…)

ヲ級「守備範囲が広いんじゃないかと、心が広いのよ。はい、お茶。」

大淀「うまいこといいですね…と、ありがとうございます。」

くく柊龍夜 side く

どう？ねえどう!?面白かった？俺的にはちよつと怖かったぜ…

大和「これで終わりですね。で、どうするおつもりですか？」

柊龍夜「… あいつを本部に突き出すか。少しくらいの見返りもあるだろう。」

大和「そうですか。ではこちらを。」

柊龍夜「これは？」

大和「証拠です。少しでも役立ててください。」

柊龍夜「… よく集めれたな… 感謝するよ。それじゃ。」

さて… ショータイム… かな？

柊龍夜「こんにちは、横須賀の提督さん？」

横T「あ？んだよ、もう戻ったのか。で、何の用だ。」

柊龍夜「あなたに、辞表をだしてもらいます。」

横T「… なにを言っているんだ。俺は、上から何か言われるようなことしていないぞ！」

柊龍夜「知りません… 知ったことか。ここに証拠はあんだよ。ほら、確認しろ。」

横T「く… なんでこんなものが！」

柊龍夜「… あなたは、艦娘に、暴行を加え、さらには、その… セクハラより上のことを

していましたよね？これを見れば誰もが信じます。」

横T「これをどうするつもりだ…？」

柊龍夜「無論、上層部の方に見せてもよいですが、それではあなたの名誉が傷つくでしょう？だから、辞職していただきたいと申しているのです。」

横T「クソツッ！こうなりや…！」

柊龍夜「(やっぱり殴り掛かるか…) 爆破斬。」

横T「！な、なんだそれは！この… 化け物め！」

柊龍夜「生憎、化け物ではなく、吸血鬼だ。だが、どちらにしてもあなたには辞めてもらう。あきらめてください。」

横T「くそ… くそっ!!」



相変わらず、人間という生き物はおろかなものが多いな…。とりあえずこの一件で沢山の仲間ができた。うれしい限りだ。え？誰が増えたって？リストアップするから、待てよ。

重巡洋艦… 鈴谷、摩耶

戦艦… 大和、陸奥、榛名、ウオースパイト。

空母… 加賀、蒼龍、鳳翔。

軽巡… 阿武隈。

駆逐… 浜風、潮、山風。

そしてなんと… 明石。

え？こんなにいるわけないって？勘のいい奴は嫌いだね。でも、こんなに仲間が増えてうれしいなあ…。帰るか。

柊龍夜「たっだいま…。」

ヲ級「おかえり。紅茶をいま淹れるわ。」

柊龍夜「…これはこれで…。」

大淀「やつぱり…。で、彼女らは？」

柊龍夜「連れてきた。ダメだったかな？」

大和「こ、こんにちは。」

大淀「いえ、そうではなくて。あ、こんにちは。彼女らは、ヲ級さんはどう思っている？」

柊龍夜「お嬢様口調になるとは、可愛い。じゃなくて、彼女らは…快く思っているじゃないかな？ね、皆。」

(横須賀からの) 艦娘「そう…。ですね…。」

大淀「提督？」ゴゴゴ

柊龍夜「ごめんごめん…。でも、これからも連れてくるし、多少はね？」

鈴谷「… 提督って面白いね！べつにいいんじゃないかな？ここは提督の鎮守府だし、提

督の自由だよ。あ、でも。私たちがつらいのはやだからね？」

柊龍夜「わかってるさ。皆、改めてよろしく！」

## 第5話

第十四話くく意識的と無意識的な奴らくく

金剛「オー！これはこれは、榛名じゃないデスカー！」

榛名「え？金剛お姉さま？よかったく…のかな？」

柊龍夜「そこはよかった、でいいだろうに…。」

鈴谷「まあまあ。この娘はちよつとばかり、天然なんだよ？」

柊龍夜「自然にぶりっ子するタイプか…。」

金剛「ソウネー…大抵の『榛名』は、ソウデスヨ？」

柊龍夜「そうか…でも、榛名は榛名だし、いつか。」

榛名「当たり前ですよ！榛名は一人しかいません！」

三人「くそう…だね…。」

榛名「??？」

ヲ級「何しているの？」

柊龍夜「暇だからな。(こいつらで)遊んでる。」

ヲ級「そんなことしたらダメでしょ…。」

柊龍夜(心読むな…ん？心を…ああ、そういう。)

ヲ級「…で、紅茶…いる？」

柊龍夜「頼むよ。皆の分も持ってきてくれるかい？」

ヲ級「もちろん、たやすいことね。」

なんとなく。そうなんとなくだが、心を少しの間でも読めた理由がわかった気がする。恐らくは…十中八九、ヲ級のおかげだ。でも、そんな力があるなんて…

鈴谷「それよりも提督？今日の鈴谷、なにか違うと思わない？」

柊龍夜「昨日が初対面だろうが。変化に気づくなんて、至難の技だ

よ…。(髪型が違うな

。あと、スカートが昨日より短い。でも、これを言えばセクハラになりそう。)

ヲ級「滅茶苦茶簡単に当ててる…。」

鈴谷「もく、なんでわからないの?」

柊龍夜「セクハラが怖いから。」

鈴谷「えー?提督、ちよつとませてる感じ?」

榛名「それはどちらかといえれば鈴谷さんでしように...」

鈴谷「何か言った?榛名さん。」ニラミナガラ

榛名「いいえ何も?でも、少しでも聞こえたとしたらそれは、鈴谷さんが潜在的に意識していることでは?」ニラミカエシナガラ

女つて...こええ...

柊龍夜「なあ、鈴谷。榛名。ちよつと出かけないか?」

鈴谷「何それ何それ!デートに誘ってる感じ?」

榛名「いいですね!どこに行くんですか!?!」

柊龍夜「...シヨタコン...」ボソツ

鈴谷・榛名「ギクツ

柊龍夜「...俺がじゃなくて、子供である俺がいいんだ...」

鈴谷「ち、違うし!てゆうか、自意識過剰すぎなんじゃないかな?

提督。」

榛名「そ、そうですよ!早とちりがすぎますよ?」

柊龍夜「そう...じゃ、これから証明してね...」

てなわけで、少し兵庫のほうまででた。少しじゃないけど。

榛名「わあー!とつても華やかですね!」

鈴谷「そうかな?これくらい普通じゃない?」

柊龍夜「んー...東京の近くにいたら、少しだけ見劣りするんだろ

うか...関西ではしっか

りとした花街だな。いや、それは京都か?」

鈴谷「それ以上は失礼なんじゃないかな...」

柊龍夜「そうかな?」

まあ、実際問題、結構失礼だ。兵庫にだって、名所の一つや二つある。神戸や芦屋が有名なのだろう(関西圏の人じゃないなら、姫路城

とかか?)。

柊龍夜「とりあえず、もうすぐでつくから、手を握ろうか。」

鈴谷「・・・一応聞くけど、なんで？」

柊龍夜「はぐれると危ないから。」

榛名「それだけなんですか？」

柊龍夜「当たり前だろう？それ以外に何かあるか？」

二人「いやあ・・・何も・・・」

柊龍夜「にしても今更だが、二人とも私服可愛いな。さつきからい  
ろんな人が二人のこと

を魅入っているよ！」

鈴谷「それは・・・見た目しか見てない汚い人たちだから・・・」

榛名「体に興味があるのでは・・・」

柊龍夜「は？んな分けねえだろう。皆、二人の可愛さに思わず二度  
見しているんだ。」

鈴谷「・・・あまりの大きさにでしよ・・・」

柊龍夜「・・・早く行こうか・・・」

榛名「はい！」

何故だろう。深く傷つけてしまった気がする・・・

鈴谷「なにここ！いろんな服があるよ！」

柊龍夜「服から見るのかい？お洒落さんだなあ・・・」

榛名「そりゃあ、身だしなみを整えたほうがいいでしょう？」

柊龍夜「んー・・・君たちは何もしてなくても可愛いし、必要最低限で  
いいんでない？」

鈴谷「ねー提督？そんなすぐに女の子に可愛いなんて言ったらだめ  
だよ？」

柊龍夜「どうしてさ。本当のことをいって何が悪い。」

鈴谷「えと・・・勘違いするこが出てきちゃうから？」

柊龍夜「なぜ疑問形・・・てか、俺なんかに言われて勘違いする奴は  
いないだろう・・・」

榛名「そうでしょうか？提督は、子供や大人関係なくかつこいと  
思いますよ！」

柊龍夜「… こういうこと?」

鈴谷「こういうこと…」

榛名「?なにがですか?」

柊龍夜・鈴谷（無意識ってこわいなあ…）

しばらくして…

鈴谷「提督!この服ほしいな!」キラキラ

柊龍夜「いいけど… 後悔すんなよ。もう少し悩まなくていいの?」

鈴谷「大丈夫だって!そんな子供じゃないし!でも、心配してくれてありがとね?」

柊龍夜「かわいいい…」ボソツ

鈴谷「あうう… / / / カアアアアア

榛名「私はこれがいいです!」

柊龍夜「わかった。レジに行くか。」

店員「計2万6800円になります。」

柊龍夜「(意外とたっけ…)これをお願いします。」

店員「三万円からお預かりします。こちらお釣りの3200円と、レシートになります。お買い上げありがとうございました!」ニコツ

柊龍夜「可愛い人だなあ… ありがとうございます。」

店員「カアアアア

鈴谷「… 何してるの?浮気?」

柊龍夜「まで。まず付き合ってすらないぞ。」

榛名「ソウデスヨ。テイトクハワタシノモノデスヨ?」

柊龍夜「お前はお前で大丈夫じゃねえな…」

鈴谷「次はどこ行くの…?」

柊龍夜「子供らしくゲーセン。」

榛名「早くいきましよう?」メガウツロ

何故浮気なのさ… 俺、愛されてるなあ（思考放棄）。

柊龍夜「さて!クレーンゲームだ。」

鈴谷「え… 大丈夫なの？」

柘龍夜「当たり前だ。いつもヌルゲーと化している。」

榛名「では、あのぬいぐるみが欲しいです！」

柘龍夜「でかい… 熊？」

榛名「そうです！お願いしますね！」

柘龍夜「まあ任せろ。」

と言つて、二百円（この台ぼったな…）を投入し、アームを動かした。アームでつかんで取るんじゃないやなく、開くときに動かす。慣れるまで時間こそかかったが、楽にはなつた。

柘龍夜「… よし、取れた。どうぞ？」

榛名「わあー！ありがとうございます！」「ニコニコ

柘龍夜「… なあ。少し屈んで。」

榛名「？分かりました。」カガミ

柘龍夜「ギュー

榛名「!??!な！何してるんですか!?!」カオマツカ

柘龍夜「すまん、可愛すぎて我慢できなかつた。後悔してる。周りからの視線がいたい

ぜ…。」

榛名「

鈴谷「ちよつと?」「ゴゴゴ

柘龍夜「そうだ。鈴谷も何か欲しいのあるか?」「ニカツ

鈴谷「… 犬のぬいぐるみ。」

柘龍夜「相分かつた。任せろ。」

さつきと同じ要領で、犬のぬいぐるみを取って見せたら、

鈴谷「えへへ！ありがと!」「ニコニコ

柘龍夜「ダキヨセル

鈴谷「… あう／＼／」

てなわけで、帰るか… 大淀に任せっぱなしで、結構（大分かなり）

申し訳ない……

柘龍夜「ただいま。大淀、すまない。今すぐ仕事に戻るよ。」

大淀「……はっ！えっと、提督。お戻りになられましたか。で、その二人は何を？」

鈴谷・榛名「提督にくつついてる（くつついています）。」

雲龍「うらやましい……」

柘龍夜「なんで……おいで？雲龍も。」

雲龍「いいの……？」パアア

柘龍夜「いいともさ。大淀もどう？」

大淀「遠慮しておきます。あ、あと。元帥さんから電話がありました。提督がお出かけになつていたので、後でかけると言っておきました。どういたしますか？」

柘龍夜「後でかけるといつてしまったなら、そうするしかないだろう。」

番号……入れて……かかったか？

元帥「……もしもし、元帥だ。」

柘龍夜「あ。柘龍夜です。先ほどは申し訳ありませんでした。」

元帥「おお！柘君か。大丈夫だよ。そんなに大きな用でもないしね。」

柘龍夜「……そうですか。で、その御用というのは？」

元帥「それはだな。今度、軍での飲み会があつてな？君は飲めないだろうが、ぜひ紹介しておきたくて。」

柘龍夜「それはそれは。ありがとうございます。それと、魔法でアルコールは抜いてるので飲めますよ。」

元帥「そうだったのか……いやはや。やはり君には驚かされてばかりだ。これからも楽しませてくれよ？」

柘龍夜「できることはさせていただきますとも。それでは。」

とまあ。電話を切つて。飲み会？……と思つていると、電報で詳しい日時や場所を送られてきた。

柊龍夜「∴ めんどくさそう。」



## 第6話

第十五話くく長いものには巻かれたくく

元帥の誘いに乗って俺は、飲み会へ行くことになった。問題としては、一人で行くのは少し怖いのでな。誰を連れて行こう…酒に強そうで、エロ可愛い感じで大人を油断させる奴…

柊龍夜「…ウォースパイトを連れて行こうかな。」

ウォースパイト「admiral、ワタシでいいの…？」

柊龍夜「？君が適任だろう。失礼を承知で元帥を含み、皆変態だろうしな。」

ウォースパイト「…ひどくないですか？」

柊龍夜「まあ、その。すまないとは思いますが…頼むよ。」

ウォースパイト「…ハア、仕方ないわね。いいわ。」

どうしてウォースパイトかって？上記に加えて、酔った時可愛くなりそうだったから。

とまあ、おっさん臭いことは置いといて、天龍を連れて行きたかったが、酒に弱いと聞いたのでな。無理に連れまわす必要もない。ウォースパイトなら、酒に強いらしいしな。丁度いいだろ？

柊龍夜「さて。そろそろ行こうか。」

ウォースパイト「ええ、わかった。」

元帥は、権力云々ではなく、飲み場所を皆が多数決で決めた（俺抜き）、本営のそばの居酒屋としたらしい。どうしたところで、皆さんが待ち合わせの時間に間に合うわけでもない（順序が違うけど、夜七時頃）。うちは余裕を持っていたので、のんびりと本営に向かっていった。その道中（海上）で、ウォースパイトは、「なんだかいものね。Japanの夜も。」

とつぶやいていた気がする、いや、実際に言っていたかもしれない。俺は本営への方角が正しいかどうか、に気を取られていたので聞こえていなかったかもな。でも、彼女の横顔は凜としていて、とても美し

かった。これだけは確かに覚えているよ。

ウォースパイト「admiral、ここじゃないかしら？」

俺は地図とにらめっこをしていた顔を前に向けるため、首をあげてみる。地図との勝敗がわかったところで、地図を燃やした。魔法で便利だなあ……

そして、顔を上げたところで気づいたのだが、元帥が俺のほうを見て手招きをしていた。俺はあんたの息子か！って突っ込みをしたくなるくらい爽やかな笑顔を向けて。

柊龍夜「……行こうか。元帥が子供にも見えてくる前に。」

ウォースパイト「……そうね。」

元帥「柊君よ！ずいぶんと早かったな！」

ウォースパイト「……もう酔ってるんですか？」

ウォースパイトがそういうのも仕方がない。なにせ元帥は。もうすでに上着を脱いでいた。ウォースパイトの思う酔っ払いというのは、服を脱いでいるのだろうか。

元帥「いや。まだまだこれからだ。それにこの程度で酔っているのは皆に顔向けが出来んしな！」

こんなことを言ってるが、焼酎の空き瓶が4本ほどあった。今飲んでるものは5本目の途中らしい。何時間前から飲んでんすか……急性アルコール中毒になっても知りませんぜ？

柊龍夜「飲んだくれもいいところですね……ところで、他の方は？」

元帥「あいつらならまだだよ。あと三十分は来ないだろうな。」

柊龍夜「そうですね。何か企んでいるんですか？」

元帥「ははは！君は頭のキレが良いだけでなく、察しもいいんだな！！」

ウォースパイト「……笑ってごまかす気？」

元帥「おっと、そんなににらみつけてくれ……君のこの艦娘はみな怖いな。」

柊龍夜「そうですね？可愛いですがね。」

くく元帥sideくく

この子が管理する艦娘は、なんというか……独占欲？が強いのだろ

う。凄みがある。この子はそういったものを引き寄せる。の दौरान…

自分の管理する艦娘のことを言えているあたり、ホワイトなことが確認できる。うれしく感じるのは、この子を息子のように思ってしまうからだろう。

元帥「… まあ、君の言った通り、私は企んでいる。」

柊龍夜「… 何をですか。」

元帥「それは…」

柊龍夜・ウォースパイト「」（； ㇿ）ゴクリ…」

元帥「複数ある。一つ目は、君のところに毎日資材を潤沢になるほど支給したいんだ。」

柊龍夜「… まじ… すか？」

元帥「まじ… です。」

この年頃なら、少しノリに乗ってしゃべるほうが飽きないと、うちの香取に言われたが、どうやらその通りらしいな。

目がキラキラしている。

元帥「二つ目は、君が望む艦娘を三人そと「赤城と長門と鹿島を！… わかったよ。」

ウォースパイト「… admiral、帰ったら説教です。」

柊龍夜「お前は俺の親か。なつてくれよ… 忘れて。」

… 何か、事情があるのだろうか。普通なら顔を赤らめて恥ずかしがるだろうに。だが、悲しそうに俯いている… 私にできることはないが、せめて心の支えになつてあげたいものだ。まあ、そう思つてもなれないのが大人… 人間なんだがな…

元帥「… 三つ目に、君のそこは確か、深海棲艦を管理していたよね？」

柊龍夜「ええ、まあ。それで？」

元帥「よその鎮守府で、姫級二体が捕獲されたんだ。そちらで預かってくれないか？」

柊龍夜「預かるより、貰いますね。」

元帥「そ、そうか。」

ウォースパイト「admiral、懲りてないの??」

柊龍夜「可愛いな」真顔

ウォースパイト「アウ／／／」

元帥「見せつけてくれるな。」ハハハ

柊龍夜「渡しませんよ。」

元帥「…君も君で独占欲が…」

柊龍夜「え?」

元帥「…何にもありません…」

子供に負けるとは…

〈〈柊side〉〉

柊龍夜「…早めに来てよかったです。」

元帥「そういつてもらえてよかった。ところでウォースパイト、君は何が飲みたいんだ?此処の店主はある程度なら出してくれるぞ。品ぞろえもいいしな。」

ウォースパイト「なら…Cask Aleを。」

店長「裏行くから待つてな!」

ウォースパイト「あるのね…」

元帥「そりやな。この店は揃いがいいんだよ。」

柊龍夜「揃えがいいどころじゃないです。あ、僕は? uicab

tr・nで。」

元帥「…飲むの?」

柊龍夜「はい。吸血鬼なんで、問題ないです。」

元帥「…吸血鬼?今そういつたかい?」

柊龍夜「ええ。それが。」

ウォースパイト「…」

元帥「…君は、どこの生まれだね?」

柊龍夜「流石元帥殿。察しが良いようで。」

元帥「真剣に聞いているんだ。包み隠さず教えてくれ。」

柊龍夜「…簡潔にですか、詳しくですか。」

元帥「…」

柊龍夜「すみません。まあ、言っても信じてもらえないでしょうが。」

僕はこの世界にとつての並行世界から来ました。」

元帥「目的は。」

柊龍夜「言えません。ただ、この世界を滅亡させる。なんてことをするつもりはありません。むしろ守りたいと思っています。」

元帥「……わかった。君のことを全面的に信じるよ。」

柊龍夜「……感謝します。」

元帥「まあ、何をしたとしても、君はもう仲間だ。仲間である限り、僕は君の味方だ。」

柊龍夜「……なら、一つ。いわせてほしいことが。」

元帥「ん？なんだね？」

柊龍夜「“仲間”ではなく、“友達”になってくれませんか。」

元帥「……ふふ。面白いことを言うな。」

柊龍夜「まあ、子供らしいと、自分でも思いますよ。」

元帥「いや、そうではなく。」

柊龍夜「?ならどういう……」

元帥「私も、同じことを考えていた。」

柊龍夜「……」

元帥「……」

柊龍夜・元帥「ハハハハハ！」

柊龍夜「まさか、そうだったんですね。」ハハ

元帥「ああ！私も驚いたよ！」ハハハ

柊龍夜「僕が言うのもおかしいですが、僕たちはまだまだ子供のようですね！」

元帥「うん、どうやらそうらしいな！」

ウォースパイト（羨ましい……）

こんな、変なところで馬が合うなんて……元帥も、単純なんだな……俺もだ。

でもほんと、こんなこと思えるなんて、世界はまだまだ平和だな！

店長「ハイお待ち！カスクに、ツイカだよ！」

柊龍夜「店長、聞こえてたんですね。」

店長「まあね！でも、途中は聞こえなかったかもな！」

柘龍夜「・・・お心遣いありがとうございます。」

店長「・・・何のことだい？」

ウォースパイト「!delicious!!ありがとう!」

柘龍夜「おっと、他の皆さんもついたようですね。」

呉T「・・・あ。えつと・・・」

柘龍夜「へー・・・こんにちは？」

呉T「ひっ!ご、ごめんなさい!!」

柘龍夜「きれいな礼ですね。まあ、別にいいですよ?また資材、お願いしますね?」ニタア

呉T「わかりましたっ!」

元帥「もう手懐けたのかい?」コソコソ

柘龍夜「うーん・・・手懐けたより、飼いなりましたかね?」クスクス

元帥・ウォースパイト（悪魔だ）

横T「初めまして、よろしくね?」

柘龍夜「新しい人になったのか・・・よろしくお願いします。」

元帥「君が手伝ってくれたようなものさ。」

舞鶴T「やつほー!よつろしくー!!」

柘龍夜「チャラいつすな。よつろしくーです。」

舞鶴T「君面白ソーじゃん!今度遊びにいったいいい?」

柘龍夜「うちの子に何もしないならな。」ニラミナガラ

舞鶴T「もっち!そんなの当然じゃん?」

柘龍夜「鈴谷と気が合いそう・・・いや、同族嫌悪に陥るかもな。」

ウォースパイト「確かにね・・・」

元帥「さて!皆が集まったことだ。飲みなおすとするか!」

柘龍夜「あんたは自重しろ。」

元帥「ハイ・・・」

T達（(あの元帥が負ける・・・だと!?)）

この後滅茶苦茶呑んでくれた。

ノルマ達成は置いとくとして。やはり男は変態だ。手を出すこと

こそしないが、胸にばかり目線を送っていた。ウォースパイトは酔って暑くなつたのか、服がはだけていた。正直言つて俺も目が泳いだぜ……！

柊龍夜「なあ元帥。」

元帥「ん？どうしたんだい？」

柊龍夜「あなたは今、相当酔っている。」

元帥「……そうだな。」

柊龍夜「俺も少し酔っている。」

元帥「そうか。」

柊龍夜「少しくらい口が滑つても、あなたは酔っていて覚えてないだろう。」

元帥「だろうな。」

柊龍夜「……少し、話を聞いてくれ。」

元帥「……ああ、構わんよ。」

柊龍夜「俺はさつきも言った通り、吸血鬼だ。」

「さつきも言った通り、異世界から来た。」

「俺の世界では、魔法が普通だ。」

「他の世界にもあるのだろう。この世界は知らんが……」

「……あなたは、俺がなんでここに来たかを知りたがっていたよな？」

「俺は「オーブ」つてのを探しに来た。」

「どこにあるかなんて知らないし、形や色も知らない。」

「まあ、オーブっていうくらいだから丸いだろうけど。」

元帥「そうか。」

「君がそこまで話してくれるとおもわなんだ。」

柊龍夜「……」

元帥「あはは。私も大分酔つてつ来たようだ。」

「私も少し、話させてもらおうよ。」

「僕はね？君の言うこの「世界」で、最年少で軍学校を卒業したんだ。」

「具体的には、14歳のころに。」

「その3年後には私は元帥になった。」

「当時は、艦娘なんて存在も、深海棲艦という存在もなかった。」

「彼女らがいなかったところは、軍艦を運用していた。」

「今の比にならないくらい、死者もいた。」

「彼女らが出現したのは、私が19のころだ。」

「彼女らを運用し始めてからは、人の死者は減った…」

「死者こそ減ったが、艦娘の死亡はよく聞くようになった。」

「深海棲艦は、今の私の見解では沈んでいった軍艦の穢れた魂。」

「艦娘は軍艦の清い魂だと考えている。」

「正しいかどうかはわからないし、正しいかどうかを確認する暇もない。」

「今は、上層部… 天皇や、近くにいる奴らに、聞いたです。」

柊龍夜「… どうして、天皇なんだ？」

元帥「… あいつらはこのことに関するすべてを知っているだろう。」

「一体何を考えているかなんて知らないし、」

「知ったところでどうこうできないだろう。」

「だが、私の正義が、それを許さない。」

「私は、正しい道を探したいんだ。」

柊龍夜「そうか…」

「なら、手伝ってやるよ。」

「正しい道を探すのを…！」

元帥「…！」

元帥「ありがとう。」

柊龍夜「… フツ。」

元帥「… そうか… 君はそうだな。」

柊龍夜「ああ。俺はそうだ。別に長い付き合いでなくともわかるだろう？」

元帥「ああ。君は分かりやすいからな。」

この後も、何時間かにわたって呑んでいた。あ。未成年の飲酒はすんなよ。したら警察行きだからな。

でも… 軍艦の穢れた魂に、清い魂か… 面白い考えだな。

柊龍夜「さて、ウォースパイト。そろそろ帰るか。」



ウォースパイト「わかったわ…」  
柊龍夜「可愛い…」  
ウォースパイト「／／／」

## 第7話

第十六話くありがとうは大切ですね？く

俺の朝はいつもひよんな事から始まる。ひよんの意味を知らないけど。

まず始めに天龍を起こしに行く。そのとき天龍は、

「んだよ… もう朝か… 一緒にあと五分寝ようぜ…」

とかいつてくる。可愛い。

次にヲ級を起こしに行くのだが、気まぐれな彼女は寝る場所も気まぐれで、どこにいるのか分からない。

とか言つてると、

「どうしたの？」

と彼女が話しかけてくる。可愛い（デジャブ）

そのつぎに翔鶴が起きてくる。

「おはようございます、提督！」

やっぱり可愛い。うちの娘はみんな可愛い。

今度は大淀が

「提督、任務はこちらの通りです！」

と、笑顔で表を渡してくれる。可愛い。

気づけば鈴谷が

「提督、紅茶だよ？」

と、俺の好きな熱すぎず温すぎずな温度の紅茶を淹れてくれる。嬉しいし可愛いいいいいい。

最近では赤城や加賀が

「提督！弓の稽古をつけてください！」

さらに摩耶が

「剣道の稽古をつけてくれよ！」

とかなんとか。剣道はできても弓道は… まあ三人とも可愛いから頑張るか！

次に明石だが、

「提督！面白いものを作りました！」

とかなんとか言つて、好感度メーターなり焼きもちメーターなりと、SSにありそうなものばかりを持つてくる。試しに明石からの好感度を計つて見れば92で、焼きもちの方は58と、なかなかすごかった。フフコワ。

大和に関しては、

「てーとくー！可愛いですねー！食べて良いですか？二つの意味で。」  
…ぶっ壊れてる。

鹿島は、

「練習艦相手に何もしてくれないなんておかしいです！もっとあんなことやこんなことしてください！」

…ぶっ壊れてる（デジャブ）

とまあ、俺の今まで（三週間程）の流れだったが、ひよんに当てはめるのは難しいことだろう。なんせ、まだあるんだから。

自分の寝室（提督室の隣にある。ドアは外からも提督室からも入れるようになってる。）に戻ると、

柊龍夜「… またか、金剛に榛名。俺の布団に入りやがって。」

榛名「わ、私は止めました… でも欲には勝てません！」

金剛「別に減るものじゃないからイイヨネ！つて榛名が言ったじゃないですカー！」

榛名「な、何言ってるんですか！」

柊龍夜「… 別にいいけど。寝るときに入ったらそのときは覚悟しろ？」ギロツ

金剛「あうっ… 分かったデース…」

榛名「えへへ／＼／」

榛名は何に対して照れているんだ…？

とにかく、最近是谁かしら、俺が戻る時に布団の中に入っている。これがひよんに当てはまるだろう… 当てはまるだろ？（脅迫）

柊龍夜「あ、そうだ。今日は舞鶴の提督来るから。」

金剛・榛名「唐突デース（です）…」

柊龍夜「タイミングって大事だよな。」

コンコン

柊龍夜「?どうぞ。」

舞鶴T「やつほー!来たよー!」

柊龍夜「必要最低限の礼儀はあるんですね!」

舞鶴T「ちよ、ひどくない?ま、いいけどさ。それと、俺のこと名前前で呼んで?」

柊龍夜「名前を存じ上げておりません。」

舞鶴T「え?そだっけ?えとね!椎野美咲ってんだ!ミサって呼んでね!」

柊龍夜「... ミサさん。隣の娘、今にも怒りそうですよ?」

大淀「... そんなことないですよ?」イライラ

椎野美咲「およ?ごめんごめん!居るの忘れてた!」

大淀「へー?そうですか。いつも任務私に任せっぱなしで?」

椎野美咲「ごめんなさい。」

柊龍夜「まあまあよだよ... 大淀さん、その辺にしては?」

大淀「あなたもですか。ハア

椎野美咲「おー!やつぱそうだよね!大淀はよだよだよね!」

柊龍夜「は、ははは...」

椎野美咲「あ、あとね、タメでいいよ?」

柊龍夜「失礼ですがおいくつ?」

椎野美咲「失礼極まりないね?まあ、20だけど。」

柊龍夜「高校デビュー失敗したんですか。」

椎野美咲「何故分かった!」

柊龍夜「そんなキャラだと、ねえ?」

椎野美咲「まったく... で、何の用?」

柊龍夜「ありません。ただどんな人か知りたいだけなので。」

大淀「私は部屋から出ときますね。」

柊龍夜「ありがとう。ならここの大淀とでも話してあげてください。」

大淀「分かりました。」ガチャン

柊龍夜「... さて、ミサ。聞きたいことがあるんだ。」

椎野美咲「... いいけど、真面目に喋れないよ?」

柊龍夜「構いません。では、質問です。あなたは、艦娘をどのように考えてますか？」

椎野美咲「… そーだなー、友達？てかタメで「この年の差では流石に無理です」アツハイ」

柊龍夜「では、深海棲艦については？」

椎野美咲「んー… 敵としか…」

柊龍夜「そっちの真面目に喋れないですか！」

椎野美咲「今更だね！その通りだよ！」

柊龍夜「… かえってそのほうが、この世界ではいいのかもしれないなあ。」

椎野美咲「？どういうこと？」

柊龍夜「いえ、なんでも。なら、艦娘が退役後、どうなるかご存知ですか？」

椎野美咲「えっと。その…」

柊龍夜「艦種にもよりますが、強制労働が殆どです。」

椎野美咲「そう… なんだ… ねえ、どうすればいいの？」

柊龍夜「それについては、元帥とも話を進めている途中です。」

椎野美咲「え！元帥殿と!!」

柊龍夜「ええ。彼は友ですから。」

椎野美咲「そんな人を見れるなんて… 俺は幸せだね！」

柊龍夜「能楽的ですね… とにかく、この話はこの辺で… 紅茶、いきます？」

椎野美咲「お願い！」

柊龍夜「ふふ、分かりました。少し待っていてくださいいね。」

… ふふってなんだ。我ながら。

椎野美咲「ねね、そーいや君、何歳？」

柊龍夜「12です。それが？」

椎野美咲「いや… 随分と大人びてるとうか。本当にその歳？」

柊龍夜「困ったな、身分を証明するものがないんですが…」

椎野美咲「え？保険証は？学生証は？」

柊龍夜「… まあ、貴女は信用できそうですし、伝えておきますよ。  
（少年説明中）（めんどくさいだけ）」

椎野美咲「どんな魔法が使えるの!？」

柊龍夜「どんな… 錬金術とか、治癒とか、色々です。」

椎野美咲「見せて!」

雲龍「止めた方がいい。」ヒョコ

柊龍夜「… びっくりした。どうしたんだ?」

雲龍「いえ、なんでも… それでは。」

椎野美咲「… 不思議な娘だね。」

柊龍夜「そうですか? 可愛いですよ?」

椎野美咲「へ、へ…。」

柊龍夜「とにかく、そういうことなんで、身分は提示できません。すみません。」

椎野美咲「まあ、事情は分かったよ! だから、魔法、見せて?」

柊龍夜「… 分かりましたよ… まずは、初級のファイア。」

椎野美咲「おお! 凄い! 暑いよ!」

柊龍夜「次も初級の、アイス。」

椎野美咲「おお! 凄い! 今度は寒いよ!」

柊龍夜「今度は上級に分類されるレポート。」

椎野美咲「え! 瞬間移動すんの! 孫悟○じゃん!」

柊龍夜「この世界にも漫画とかあるんだ…。」

椎野美咲「凄いね魔法って! 他にも見たいな!」

柊龍夜「今じゃなくていいですよね?」

椎野美咲「えつと… また会えるし… そうだね! うん!」

柊龍夜（やべ… 可愛い…）

椎野美咲「ねね、ここにはさ、どんな艦娘がいるの?」

柊龍夜「可愛い娘しかいません。」

椎野美咲「おう… 相当な親バカになりそうだね…。」

柊龍夜「親バカですって? 可愛いのだから仕方ないでしょう!」

椎野美咲「そ、そうだね?」

ヲ級「… なにいつでも聞かないから無駄だと思うな…。」

柊龍夜「いつの間に… あ。ご飯ちゃんと食べた？」

ヲ級「うん。りゅーは？」

柊龍夜「まだ。あとでミサと食べるよ。」

ヲ級「わかった。じゃあまたあとで。」

柊龍夜「ああ。」

椎野美咲「… 食べていいの？」

柊龍夜「なに食べますか？」

椎野美咲「そこはもちろん…」

柊龍夜「ああ… そーですよね？」

椎野・柊「カレー!!」

柊龍夜「… 僕たちは、気が合いすぎるようですね？」

椎野美咲「そうみたい。でも、気が合いすぎない。よりはいいんじゃないかな！」

柊龍夜「… そうですね。では、作ってきますね。」

椎野美咲「… そんな直ぐにできる？」

柊龍夜「ええ。まあ、そこで待っててください。一秒で終わりますよ。」

椎野美咲「一秒ってどーゆー…？」

柊龍夜「… ラストワールド。」ユビパッチン

そういいながら、彼は指をならし、彼の世界を展開する。この世界では、何をしようが、怒るものはない。彼のしたいことをするため  
の世界。

ではないから安心しろ。ただ時間を止めただけだ。俺が命じない限りは、そこら辺の物質は化け物のように硬い。分子が動かないからだ。俺は動かしたいもの… 具体的にはスパイスたちと鍋など、カレーをつくるのに欠かせないものに、動けと命じる。するとあらゆる不思議。ものが簡単には動くではありませんか!… 茶番は置いておこう。俺は二時間かけた。カレーを作るのに。そしてもう一度指を  
ならす。

椎野美咲「ラストワールド？なにいつて…!!」

柊龍夜「はい、カレーですよ。」

椎野美咲「どういう…こと…?」

柊龍夜「時間をとめて、俺の世界でカレーを作っただけですよ?」

椎野美咲「時間をつて… 凄いね!」

柊龍夜「さ、召し上がれ?」

椎野美咲「… 12歳の子に負けてるなんて…」

柊龍夜「どうしました?」

椎野美咲「な、なんでもないよ!頂きます!」

柊龍夜(可愛いなあ…)

彼女の食べっぷりは凄かった。食べ方は大人しかったが。なんとなくか… 小学校の給食でカレーが出たときに、すぐになくなるあれみたいな?他に例えが見つからないけど。

椎野美咲「ご馳走さま!美味しかったよ!」

柊龍夜「ありがとうございます。」

椎野美咲「こちらこそ、こんな美味しいもの貰っちゃって… ね? よだよ?」

大淀「… あの、うちの人が、迷惑をおかけしてませんか?」

柊龍夜「いえいえ、そんなことは。とても楽しい時間でしたよ。良ければまた、お越しく下さい。」

大淀「ありがとうございます。では、またお会いしましょう」

椎野美咲「またくるねー!」

… 台風のような人だった。



## 第8話

第十七話くそろそろ本題く

この世界にきてから、艦娘が可愛すぎて忘れていたけれど、オーブ、探さねーとな。といつても、これと言って目星もない。とりあえず今は・・・今いる艦娘のリスト書こうかな。

「私がしておきました。」

「・・・ありがとう。相変わらず早いね。」

大淀は、仕事が早い。俺が何か言う前にそれをしている。この前は、海域の名前・・・って思ってた。 「これを」といって渡された。結構怖かった。えつと・・・

駆逐艦・・・ 浜風、潮、山風

軽巡洋艦・・・ 天龍、阿武隈、大淀

重巡洋艦・・・ 鈴谷、摩耶

航空母艦・・・ 翔鶴、雲龍、加賀、蒼龍、鳳翔、ヲ級

戦艦・・・ 金剛、大和、陸奥、榛名、War spite

潜水艦・・・ 伊五十八

工作艦・・・ 明石

なるほど、流石大淀仕事丁寧・・・ え？めっちゃ偏ってる？・・・ 別にいいや。そこまで気にしなくても回れる回れる・・・ よな。さて、これからの行動を考えるか。あ、そういえば姫級が来ること伝えるの忘れてた・・・

コンコン

・・・まさか、な。

「どうぞ。」

「提督、彼女たちはお客ですか？それとも仲間になる方ですか？それとも敵ですか？」

「… 少なくとも俺は、皆と仲良くしてほしいかなーって…。」

やばいやばい… 陸奥の目の奥が暗闇だ… 天よ、ここに光あれ、なんてな。てなわけで、見た感じ姫級は、港湾棲姫と戦艦棲姫のようだ——怯えてる。当然といやあ当然か。二人とも片腕がなくなつて、傷ついて——だめだ。考えるより行動か。

「リジエネーション」

二人は、驚いた顔でこちらをみた。なにしろ先ほどまでなかった片腕が生え、傷もきれいに治つて。おまけに健康状態をできるだけもともどしたんだ。敵と認識している相手にそんなことされたら、それは大変驚くだろうな。

「… どうだ？痛みが残るようなら言ってくれ。それと、帰りたいなら帰っていいぞ。いやなに。取つて食おうなんて気もない。もちろん、残つてくれるならありがたいがな。」

「… 我々は、もともとあなたにたてつくつもりはなかった。でも、前にいたところのこともあつて、もつと痛めつけられるものと考えていた。だから言わせてくれ。ありがとう。」

… 港湾棲姫は案外饒舌なのだろうか… なるほど、この世界の提督… かどうかはわからんが、一部の人間は捕虜として確保し、拷問まがいのことをしていたのかもな。とても許せる行為ではない。だが、今の俺が上に、周りに、何かを言えるほどの立場があるわけではないから… 功績を上げるには、深海棲艦を倒さなければならない。でも、彼女らには敵対の意思は… 後天的なものだったんだ。あくまで、最初から敵対していたわけでもない。それなのに、人間が、艦娘

が、自分たちを狙うんだ。生物として正しい防衛行動をとったままで……くそ、なんとかしてやりたいけど、なにもできない。

「……そこまで考えてもらえるのはうれしいのだけれど、わがままを一つ、聞いてくれないかしらっ？」

「……内容によるが……いいよ。言ってごらん。」

「美味しいものが食べたい。」

………美味しいものとな？そこそこの物しか作れない俺に？美味しいものを要求する？……普通のご飯でいいよねお願い許して……て、さらっと流したけど、心読まれた？読まれたね。深海棲艦には少なくとも、それに準ずる能力があるのか？……とりあえず、鳳翔にも頼むか。

「美味しいという保証は、俺が作る分は保証できないが、そうだな。今日は遅れ気味だが皆の歓迎会にしようか。陸奥。皆に声をかけて、お酒とテーブルとを用意しておいてくれ。」

「ええ、わかったわ。」

さーてさてさて？鳳翔のいるここ、居酒屋みたいなもの。えくく……勝手に作ってる……別にいいけどさ。美味しいし。みんな酔うし。可愛いし。はーまじ尊い。

「あら？提督、どうなさいました？こんなところまで。」

「いやなに、大したこと……でもあるか。遅いのはわかっているんだがな、皆の歓迎会を開こうと思って。それで、ご飯の用意を、もしよければ手伝ってほしいんだ。」

鳳翔……に限らず、ここみんなは背が高い……目線が同じなのは駆逐艦の皆くらいで、ちよつと悲しくなってくる。で、鳳翔の顔を見上げているが、その顔はなんか、息子を見てるお母さん、というほど

でもないが、なんだろうか。母性がにじみ出ている。

「あら。それは楽しそうですね！任せてください、腕によりをかけて、提督に負けなくらい美味しいご飯を作ります！」

「…俺の作る飯は、そこまでおいしくないと思う…」

自分を卑下するのはめっ！ですよ？といわれた。やっべめちやくちや可愛い尊死してしまう。

さて、なにがいいかなー。全員で24人か。ご飯何合いるんだこれ。12合が普通は適量。でもみんなたくさん食べるしな…よし。30合炊く。余ったら冷凍しよ。さて、ご飯といえはおかず。パーティーなんてあんまりしないからなあ…うん。から揚げに刺身、カレーのルーも用意しておこう。なんというか…そう、バイキングみたいなやろう。そのほうが沢山の種類をみんなで食べれる。じゃあご飯はやっぱ多いな…15合。いや、若干足りないかな…足りなかつたらまた炊くようにすればいいな。よしそうしよう。

「鳳翔さん、鳳翔さんは——」

戦艦棲姫 side

思っていたのと違う。彼は今までの人類とは決定的に、明確に、違いがある。でも、何かわからない。あいまいだ。彼は存在自体があいまいだ。そこにあるはずの空気のように。

存在というものがそのあたりに浮遊している。見ていて不思議に思う。

「こら、そんなに考えてもだめ。わからないものはわからないの。それに、いいと思うわ、彼。あんなにやさしいのに、裏もない。あるとしても、絶対に人を傷つけない…そんな芯が、心の中にあつた。」

港湾棲姫……カオルの言ってることは尤もだ。私も彼を見たときに、不鮮明ではあるけれど、他人では動かせそうにない太い芯があった。けれど、彼はやはり、人間の子供だ。人間の子供は脆い。装甲的な意味ももちろんだが、精神的な方だ。大人びてるところもあるが、間違えてはいけない。彼は脆い子供……守りたい。なぜかそう思う。

「はい、お茶。」

……  
ヲ級？どうしてここに。

「提督に拾ってもらった。」

なるほど。この子やっぱりほっとけない……

「提督はね。平衡世界からきたのよ。」

「並行じゃなくて？」

「……どっちでもいいじゃない。」

そんなことはない。漢字一つで意味が変わるものはたくさんある……何故私がそんなことを考えなければならぬ……

「提督って可愛いよね。そう思わない？」

「……重症のようね。」

「私はあるのが好きなの。いろいろな意味で。」

「……ま、止めはしないわ。あんたの勝手よ。」

……  
その艦娘の戦艦を抑えてる航空母艦は一体何者……力の差があるはず……ま、いいか。

柊 side 〳

できた、皆呼んだ、食べてる。

「うめー！提督！なんでこんなにうめーんだよ!!」

「…おいしい…」

天龍から大きな声で、山風に小さな声で、美味しいといわれた俺の顔は、いま。人にあまり見せたくないくらい緩んでそう。くそ、まじって言いにくいなら…紙に書いといてくれたらいいのに…誰もなにもしない。はっ！もしかして皆味覚が人間と違う？なるほど納得した。

「…人間、そこまで謙遜してたら、さすがにうざい。そう思っても美味しいものは美味しいんだ。いい加減認めたらどうだ？」

「…ありがとう戦艦棲姫。そう。自己紹介がまだだったね。俺の名前は柊龍夜。よろしくな。」

「…チカ。」

無愛想だ。でもなんか、可愛いな。まったく、可愛い子に言われたら認めるしかない、俺の飯はうまいんだな。よし、これからはもっとうまいもん作れるようにならないと。

「ねえりゅー。どうして私たちにも優しいの？普通ならもっとう…」

「言いたいことはわかる。でも絶対。そんなことはしないよ。俺にとって明確な敵にならない限りは。」

俺はふと思う…いや、常にか。なぜ人類は、敵をすぐに作りたくなるのか、と。もう少し手を取り合うとか思わないのだろうか。

まあ、自分のことを上に考えてたら、そうなるのかな。

さて。俺はこういう、がやついた喧噪が少し苦手だから、食堂をでて、港へと赴く。夜の海辺つて静かで、真っ暗で、吸い込まれるような錯覚に陥ることもあるけれど、俺は夜行性だからか、これが落ち着く。

ふと、何かの気配に気づく。隣に誰かいるのはわかるが、まだ見えないから誰かはわからない。海に少し目をやる。水面に美しく映る女性をみて俺は少し安心した。

「加賀、皆とご飯、食べなくていいの？もしかして口に合わなかったのか？」

微笑みながら俺は、静かに、凜とたたずみ、遠くを見ている彼女に問いかける。そんな顔を見て俺は、胸が少しぎわつく。顔に出ないようになんとか自分を抑えながら。

「… 私も少し、ああいうのは苦手なの。あ、でも。提督の作ったご飯は、とても美味しかったわよ。」

「そっか。ありがとう、それは何よりだ… そっか。なら、ここでもう少し涼んで戻る？」

「… ええ、私はそうするわ。」

加賀は、なんとというか。俺の中の、しっかりとした女性のイメージに限りなく近い。だからだろうか。今俺の頭が彼女の肩に傾いているのは。しばらくして、焦って俺は彼女から離れ、謝った。

「… 別にいいのに。」

こんな言葉が聞こえたのは俺の幻聴だろうか。彼女の頬が少し赤ら顔になっているのは俺の気のせいだろうか。

… まあいい。そろそろ戻ろう。天龍になにか可愛い系の歌を歌

わせることにしよう。

「…なあ浜風。どうして潮と山風と浜風が、俺のベッドで気持ちよさそーに寝てるんだ？」

三人の少女が——うち一人は起きてこちらをしつかりと見据えている——俺のベッドですやすやと眠っている。まるで可憐な花を三本ほどつんだように。

「…提督のにおいが好きなんです。」  
「におい？」

「はい。なんなら提督が好きです。」

開き直った…。いやそうじゃない。こんな雑なラブコメ開始なんてあっていいのか。いや、答えは否だ。さてどうしたものか。

「…はあ、俺はソファで寝るから、そのまま寝とけ。」  
「提督の体に障ります。さ、どうぞ。温めておきました。」

新婚みたいなセリフは待っていない。ていうか一緒に寝たらだめだから。俺男だから。耐えろ。もう少しでソファでの安眠にたどり着く。

いやまて。俺はまだ寝れないぞ。仕事があるんだった…。くそそう。なんでこんなにも書類があるのさ。まったく。

「…手伝い…。ましゆ…。ます。」

「…可愛かったぞ。じゃねえ。子供は無理すんな、といっても、俺も子供だが。」



「艦娘だから大丈夫です。お任せください。」

真っ赤な顔のままでも…くっかわ。仕方ない。手伝ってもらおうか。

「…は！私はいつの間には提督のベッドで…あう…」

潮可愛い…

「おはよう。自室に戻ってお休み。」

「嫌です。その前に提督を独り占めして堪能して一緒に寝ます。」

えめつちや計画的。じゃない。なんでそこまで決めてるんだよ…勝手に俺との行動を決定するな…

「…提督、だめですか？」

「だめ。俺より身長高いのになんでわざわざ屈んで上目遣いするんだ。」

「…こんなに好きなのにどうして…きづかないの…」

あのー聞こえてますよー潮さーん？だめですよー？浜風よりちやんとラブコメ始めようとしてるけど、危ないこだね？ふふこわ。

「…そうだ。放棄しよう。考えることを放棄して、もう寝よう。なーに、書類は明日にでもすればいい。お休み。」

「え？ちよつと提督？だめですつてば。今日の分終わってないんですよね!？」

「いいのよ浜風…提督は疲れてるの…寝させてあげましょ？」

「えー…なんか急に大人びてる…」

よし、おはよう。てことで朝ごはん… 鳳翔さん、ありがと。こんな美味しいご飯初めてだ… つく、もつと朝早く起きて、作ってるところを観察するべきだった… 過ぎたことは仕方ない。さて、今日は事務作業を終わらせて、ちよつくら出かけるとしよう。

「… おいしい…」

「そう… よかった… 早く起きて作った甲斐があったわ…」

雲龍が作ったのか… これはこれは大変失礼しました。さて、と。

「調理過程を見せてください。」

「… だめ。あなたでも作れる。」

「俺にはこんなに美味しいものは作れない。雲龍の料理はこう… 言葉を当てるのが難しいけれど、とてもぬくもりを感じる。これはどうも、俺にはできない。だからどうか、お願いします。」

… 困ったわ… 彼女はその一言ののち、顔をふせながら俺の耳元で

「… 相手を想うことが大事…」

耳赤くし過ぎじゃない？可愛すぎ。相手を思うこと… ね。なるほどためになった。よし。お昼からもつとがんばろつと。

… さてと。俺は飯をくったあと、大量の書類と向き合う。机が半分埋まってる、早く終わらさないと…

「おいおい提督、まくだ終わってねーの？つたく、しゃーねーな。手伝ってやるよ。」

「…ありがとう。じゃあ、そっちの半分確認しといて。」

「確認だけでいいのか？」

「おかしなものがあれば、天龍は教えてくれるからね。」

ふーん。と息を吐きながら彼女は、まじまじと目を通していく。

真剣な眼差し… 美しい… そんなことを考えながら、書類に判子を押す。ただ押すだけなのに、なんでこんなに多いしめんどくさいんだ…

天龍 side

… 特におかしなことでもないが、ここにある書類の内容、その文字。なんでひらがなの方が多いのか。まあ、提督が子供なんだし、普通といえば普通だ。でもこの間、オレでも読めなかった漢字をすらすらと読んでいたんだ。普通の漢字なんて簡単に読めるだろ。でもどうして言わないんだろうか。こっちは不思議だな。

さておいて。この紙の塔を崩し終えたところで、一枚だけ気になったものがある。このあたりの海域で、怪しい人物がいたらしい… 人物といっても、艦娘か深海棲艦のどちらかだろう。困ったもんだ。なぜこの辺をうろつくかね。

「提督、これ。」

「ああ、知ってる。」

「どう対処する気なんだ？ほつといたら面倒なことになるぜ。」

「… そうだな。よし、ちよつと偵察にでも行こうかな。」

なぜ自分で行こうとするんだ… オレ達に任せればいいものを。ま、こいつはそういうやつか。子供のくせに、妙に大人ほくて、無茶に突っ込むわけでもないのに、なぜか心配に思う… まったく、なんだよこれ。

ともかくにも、転ばぬ先の杖？石橋をたたく？何でもいいけど、対策するにこしたことはねえ。さっさと片づけるとしよう。

「じゃ、一緒にきてね、天龍。」

「おう！任せときな！」

…さて、と。艤装のメンテ、先延ばしかな。

戻りまして。俺です、柊です。え？なぜ紹介口調か？目の前に不思議が転がってるから。意味がわからんと？そりやそうでしょう。なんせ…

「…この世界の…黒…か。」

「提督、ちよつと説明してくれないとそれは理解できねえや。」

「ごめんごめん…」

俺のもとの世界では、白か黒のどちらかが顕著に表れる。白と黒つてのは…濃霧？みたいないな？で、それはほかの世界では、両方が極端な現れ方をする。まあ、そこに入ると人が人じゃなくなるというか。その人の性質を白…善に、黒…悪に。変えるというわけだ。で。ここにあるのはその黒。さっきの紙に書いていた人物は恐らく、これに入ったんだろう。とりあえずは、この黒を壊すか…

「天龍、ちよつと離れててくれ。」

「え？ああ、わかった。」

「ケール…あれ、固体化しない…よし、荒々しく壊そう。」

「え？ちよ、あぶねーことはすんなよ？」

ほつといて。俺は右手に魔力を込め、無詠唱で爆破斬を作る。

「うおっ！なんだよそれ!!」

とりあえずぶった切ってみる…。 何ともない。連続で叩き込んでみる…。 だめだ。

「… どう？壊れそう？」

「全然。さて次は…。 スキル「炎舞」」

お？少しヒビが入ったか？もう少しか…。 めんどくさい帰りた  
い…

「… 形態「トランス狂人化」」

「え…。？見た目が変わった？…。 てか、雰囲気…。 ほんとに提督  
かよ…」


「いいか？天龍。この物質は少なくとも、生きている。」

「おっそうか。滅茶苦茶簡単だな。」

「… 物事は単純な方がいいのさ、生命体と言うのは、そういうものだ  
よ。 さて、仕 上 げ と 行 こ う か。 死 を も 穿 て。

「ゲイボルグ死の根底を知るものよ」

天龍 side 〳〵

さて。 さてさてさて。   をどう説明したものか。 提督は右  
手にあった火を消したと思えば、 姿が変わって。

姿が変わったと思えば右手にでっかい槍みたいなのいきなり出し  
て。

ゲイボルグ？そりゃあ…。 ケルト神話の英雄の武器じゃないか。  
あれだろ？あの…。 スカなんたらって人にもらった武器？んで、心臓  
にあたりさえすれば、そいつはもう生きれないみたいなの呪いがかかっ  
てる…。 それを持って、踊るかのように振るう…。 さっきのとは動き

が少し違うし、言葉で表すなら、先程のものよりはるかに危ないものだ。でも。言わざるを得ない。彼は——彼の振る舞いは——美しい、と。

「壊れたな。よし、帰るぞ。」

「… 後ろになんかいるぞ。」

「ほんとだ。何してるの?」

いやいや、今の今まで気づかなかったのか… いつもだったら見えないところによくしようと「なんでそこにいるんだ」と言うのに。不思議なもんだ。この時だったら襲ってもばれない… グへへ

「… なんで壊したの?」

「これが俺にとって害だから。」

「私にとっては救いだった。」

「それは悪いことをした。代わりに命以外は差し出すよ。」

「いや馬鹿か。」

なーにさらつと自分の身柄を差し出そうとしてんだよ。お前子供だけど一応提督だから。自覚もとーぜ。

で、こいつもこいつで。さっきのが救いになるたあちつとばかり、説得力に欠けるな…

「… なら、私に安定を… あなたはくれるかしら。」

「安定か… 電子の受け渡しじゃなくていいならいいぞ。」

「いや希ガスじゃねーよ…」

なんで希ガスなんだよ… じゃなくて。安定? こいつは艦娘だ。安定なんて鎮守府にいたら嫌というほどあふれているだろうに。

「君が理想を号さけんだら、応えてあげるよ。」

「… なら、私はあなたのところへ移りたいわ。」

「移るっただって、艤装の情報を変えないと…。」

「その必要はないわ。」

「どういうことだそれは。」

「だって私——黒から生まれたの。」

## 第9話

### 第十八話く異世界の片鱗く

「その必要はないわ。だって私、黒から生まれたの。」

——俺の頭がおかしいのか？

この少女は今、なんといつた？黒から生まれた？

は、ははっ。あり得ない事もないだがこの世界の物じゃなかったのになんで生命体が生まれる何がどうしてこの禍々しい鬱陶しい忌々しいこの物体から

「…黒から生命体が生まれるのは珍しいことじゃない。でもそれは俺のいた世界での話だ。他の世界では珍しいなんてほどじゃない。''あり得ない''のさ。」

「でも私は…ここに、確か、に居るの…。」

「…提督。オレは構えた方がいいのか？」

とてもじゃないけれど。言いたくないけれど。この少女は明確な敵ではない。だが、敵ではないだけで、味方でもない。不明瞭なバグ。解析不可能なプログラム…

ああ——俺の頭が張り裂けそうだ

「…冗談よ。私は響。捨てられたんだ。それで、偶々近くにいたのさ。」

「とんだくそ茶番。」

「なんだそれ…くやくねモガツモゴ」

天龍。世の中言っていることと悪いことがあるんだぜ。（おまいう）

捨てられた…か。その提督あとで始末する（決定事項）

でだ。

「うちくる？響」

「軽いなお前」



「君が良いのなら、私はどこへでも。」

ふーん。じゃあ帰ろう!!

てなわけで。元帥に聞く?自分で探す?答えは...

「...なるほど、そんなことがあったのか...」

「ま、もうなにもできないほどの精神力でしようがね。」

なにをしたのか... 教えて進ぜよう。

~~~~~

「あのさー君。子供だからって手加減されるとでも思ってる?」

「いいえ?それより、あなたこそ。大人だからと言って僕に勝てると思ってます?」

「... いい度胸してるね。じゃあこうするでしょう。うちは戦艦だけで勝負してあげる。そちらは何を使ってもいいよ?」

なめ腐った態度だ。いいだろう。その長い出鼻、跡形もなくへし折ってやる。

てなわけで。相手方の編成は長門、比叡、扶桑、武蔵、伊勢、日向だ。

こっちは誰を出してもいいそうなので...

「響。行けるか?」

「... 正直に言って、とても怖いよ。」

「だろうね。でも、自分の中にある壁は、自分で壊さないといけない。だからそのために、こいつを一緒に乗り越えないか?」

「... 君が一緒なら、喜んで。」

てわけで。こちらの編成は、響、山風、天龍、阿武隈、鈴谷、翔鶴は... 水雷もどき。やるせない... でも、勝てる。絶対に。

だってこの子たちには、あいつにはない——

「やる気と信念がある。だから...」

「ふっ、何を言い出すかと思えば。くさいな。や、あおくさい、か。」

「... うちの提督に。文句あるのか?」

やめろ。このシーンそんな長くしなくていいから。早く終わらし

たいから。なんで回想がこんな長いんだよ。

「そんなに子供の提督を信用するのかい？ま、それはそれで面白いよね。でも、あまりふざけないでくれるかな？」

「ふざけてなんかいない。司令官……いや、あなたは。人を人として見ていない。艦娘を道具としか見ていない。そんな人は誰かの上に立ってはいけないんだ。」

「……響、か。くつくつく。君がここにくるとはね。」

もう飛ばしていい？長すぎない？

「……腐った野郎だ。自分が捨てたくせに。」

「使えないのが悪い。」

彼の目は、真つすぐだった。自分は正しいと、本心から思っているようだった。ただ、彼は生まれる世界を間違えたのかもしれない。この場では彼は、歪んでしまった悪になっているのだから……

「……そんなことより、早く始めないか、提督。」

「ん、すまない長門。さて、それじゃあ始めようか。」

「……ああ。圧倒的な信念を、見せてやるよ。」

ああ、気に食わねえ態度。大人つてのは、半数はこんなだもんな。いい人だっているさ。でも、その分だけ腐った奴がいる。割合や種類は違うけど、働きアリみたいだな。

——響side——

怖い。怖い。怖い。

私の中にある感情は。ただこの一つが渦を巻いて、頭の中を駆け巡る。

怖い。怖い。怖い。

でも、私はこの恐怖に、あの……最低な彼に、

「絶対に……勝つ……！」

それが昨日までの自分との決別だ。私は、今日でやっと私になる。生まれて初めて、私になるんだ……！

「相手は航空母母がいる。輪形陣で、空にも気をやっておけ。」

聞きたくない声が聞こえる。聞こえてほしくない声が聞こえる。

この声に呼応して、この体は今にも震えてしまいそうだ。

「…落ち着け。」

「…」

「深呼吸…いや。耳を使うな」

「…ふっ。」

耳を使うなつて、そんなの、笑っちゃうよ…。

「大丈夫だよ、司令官。私はもう…勝てるから。」

「…そんなこと、わかってるよ。」

…そっか。そうだね。こんな簡単なこと、わかるよね…！

「…全艦砲台用意。翔鶴は爆撃機用意。狙うは敵旗艦並びに敵全艦…思い思いに、撃て！」

今は単横陣で、右にいる天龍は物凄い勢いで、楽しみながら、左にいる山風は、怖がりながらも、力強く…ほかの艦娘も、各々の意思を以つて相手に砲台をむけ、弾を撃つ。その姿はどれも、か弱い少女の面影はなく、とても凛々しい。

「…x o p o m o…すごいな、これは…」

「おい響！手が止まってんぞ！あいつに勝ちたいんだろお！」

天龍の声があった。言葉使いが強くて、怖いはずなのに、やさしさを感ずる。不思議と、勇気も湧いてくる気がした。

「て、天龍さんの言葉は、少し怖いけれど、その…その人のことを思つてというか…優しさなんです。」

山風の声がある。とてもか細く、こんなにも銃弾が飛び交う中では聞き取りずらいけれど、言葉の奥にはなぜか芯の通った太さがあった。

「ありがとう、山風。私はそんなに気にしてないよ。天龍も、ありがとう。もちろん私は勝つよ。皆と。」

「ったく、ほら、お前ら、口動かさねえで撃て！」

「うん…！」

勝つ…勝つ…勝つ…！勝つ！私は！絶対に！勝つんだ！

——柊side——

…なんとというかかかんとというか。うん、いつ見ても格好いいな。こ

の子たちが戦う姿は！

じゃなくて。いやー… 戦艦つよ… でも魚雷には勝てないみたいだな。

「この、僕が… 負けるなんて… !ありえない!何をしたんだ!」

「僕は何もしていません。何もできません。」

「う、嘘、だ… !ありえない!だって、だって…」

「あなたには三つ、足りなかった。それだけだ。」

「… 何が足りないって言うんだ。」

「… そんなの、優しさと、知恵と… 信念だ。」

「…」

負けた屈辱はすさまじい。負けることは誰にでもある。でも、それをその先にどう生かすか。それが大事なだろうよ。

「… 次がもし、あなたにあれば。そのときまた、頑張ってください。違う方法で。」

~~~~~

「てなわけで、疲れました。」

「そうか。お疲れ様。改めて感謝するよ。」

「なにかくれてもいいのでは?」

「子供か?子供か。」

子供です。てなわけで。なんということでしょう。勲章をもらいました… ま?じ?で?」

個数は… 12個。これは… 鈴谷と翔鶴と陸奥の改装設計図を買えと?はっ。なかなか商売上手ですねありがたく買わせていただきますありがとうございます。」

「見事な手のひら返しね…」

世の中には必要なことだよ、ヲ級。

でもなあ、練度がなあ…

とりあえず、周回かな。

「バシー海峡かなあ…」

「お?なんだ提督。バシクルにでも行かせんのか?」

「練度上げたいよねーって思うし… そうだね。」

「誰いかせんだ？ま、オレは当たり前だよな！」

そうだね。天龍が行かないのは当たり前だよ。つと、編成か… さっきの三人と… 明石、雲龍、加賀だな。

「おいおい。この天龍様はいいのかよ？」

「まだ駄目だよ。天龍は駆逐艦の面倒見てくれないと。」

「仕事押し付けたな？」

「違う違う… 僕とだよ。」

「… 私のこととは忘れたようだ… 仕方ない。電話をそつと切る」

ごめんよ元帥… そつときるを口に出すなんて恥ずかしいことさせてしまって…

でもな… そもそもこんなことをしている暇はない。俺はさつさとオーブとやらを探さないといけない…

仕方ない。この世界の魔力を測っておこう。結果は… 三十分後くらいかな。それまで遊ぼーつと。

「提督… 膝枕… して…」

「んなつ！ずるいですよ山風さん！」

「お、落ち着いて浜風さん…」

「… 提督、これがこの日常かい？」

「はあ… 手の付けようがねえな。」

なぜに膝枕… 甘え上手だ。うちの姉と妹にもこれくらいの素直さがあればな…

ではなく。

「勉強だ… 勉強をするぞ…」

「提督、疲れてねえか？」

「魔力使ってるから…」

——天龍 side——

マリヨクってなんだ… なんかカツコいいな!!オレもマリヨクつ

てのを使ってみてえ…じゃなくて。こいつらに勉強を教ええないとな。

でも、勉強って言ったって、何から教えればいいんだ…

「この場では、座学、といった方がいいだろうか。とりあえず、算数からだな。」

「流石提督。考えてんだな。」

当たり前だろ、といった顔で、紙を全員に回していく。え、オレも？

はつ。算数なんてちやちやつと終わらしてやるよ！

「…これどう解くんだ？」

「天龍さん、ここはですね…」

浜風… お前天才なのか！くつ…！オレが他人に教えられるなんて…ましてや年下に！

提督も提督で意地が悪い。なんで駆逐の相手のはずなのに、オレが面倒みられてるんだよ!!

「可愛いから仕方ない。」

「っこの…！」

「x o p o o …いいラブコメだ。」

けっ… 年下に何言われてもなんとも思わねーよ… 思ってなんか…

「どうしたんだ？天龍」

… むかつく。よし、報復しよう。めちやくちや難しい問題出してやる。

「えつと… お、これなんかよさそうだ。」

「なにが？」

「1」

$$\int (x^2 + 5x - 1) dx$$

—2

「定積分だね。 15 かな。」

なんで暗算で… しかも正解じゃねーか… こっわ… ふふ、怖いぜ。

「自分で自分をネタにする精神の強さ… 流石天龍。」  
「ちよくちよく心読むな。」

——柊 side——

積分はこの子たちには早すぎるだろうに…

「はあ… とりあえず、皆の採点でもしようかな？」

「はい！オレが最初！」

子供か!?!… 子供だな（諦観の笑み）

「… 全問間違い… 天龍。教えてもらってたよね？」

「… しらねー…」

あつ逃げた。まったく天龍め… わからなければ最後まで聞けばいいのにな。

「次は… 響にしよう。」

「… 不死鳥の名は伊達じゃない。」

… 不死鳥… か。

「一問しかあつてないね。」

「… y p a a a a !!」

「叫ばない…」

なんでここまでひどいんだ…

… 次に山風と潮の採点をしたら、

「半分づつか…」

「二人合わせて… 百点…」

「や、山風さん… 一人で百点じゃないと…」

うーん… 勉強を教えるのは、やはり難しい。よもやこんなことで躓くとはおもわなんだ。先生方にはきちんと感謝しないとな。

「… 提督。あとの駆逐艦の相手はオレに任せて、もう休んだ方がいいと思うぜ。」

「そんなに分かりやすかった？」

「ああ。目がうつらうつらしてるからな。あとその… 目線が胸にばっかり来てたぜ…」

「…ごめん」

やっぱりそういうのわかるのかあ…はつつず。

でもま、そろそろ感知も終わる頃合いだからいつか。

「ならお言葉に甘えて、休ませてもらおうよ。みんな、天龍のことよろしくね。」

「逆だろうが！」

さて。さっさと行こう。



## 第10話

第十九話く世界の声に耳をく

… うん、大体の場所はわかった。モーレイ海… 北方海域だ。なんでこんなところに…

いや、そんなことはどうでもいい。早くここまで安全が確保できるようにしなければならぬ。でもその前に、オーブっていったいなんだよ… ゲームとかでよく聞くけど、結晶体として扱っていいのか？ それとも、他の存在の仕方なのか？

… どのみち、見てからじゃないと何とも言えないな。もしかしたら、可愛い女の子かもしれない。そうだ、そうに違いない… 冗談だ。冗談だからそんな目で見ないでくれヲ級…

「仕方ない。りゅうも男の子。」

「そういう慈しむような眼をやめてくれ！」

という、いつものような茶番。何気ないこの会話。それを俺は、俺の手で終わらせなければならぬ。終わるといっても、俺が元の世界に戻るだけだから、ある意味では違うけど。

でも少し。さみしいな。

くく?? side く

最近… 特に各鎮守府の海域辺りで、深海棲艦の活動が活発化してきている。恐らくは、艦娘たちの出所を理解している。それに、すでに幾つかの鎮守府は落ちてしまった。そこは深海棲艦の停泊地になつてもいる。これ以上こちらの仲間を失ってしまうのは、芳しくない。なにかしらの手を打たなければ… でも、どうすれば…

「… もしもし、私だ。少し、話したいことがある。そちらへ伺つてもよろしいかな？」

くく終side く

成る程これが俗に言う「猫の手も借りたい」という状況か。ならば俺は猫になるしか。いやならないけど。でもな、自分のことを優先したいが、助けたい。しかし、二兎を追う者一兎を得ず。悔しいが、どちらかにしなければ… しかし、どうしたものか。

「元帥さん、久しぶりですね。」

「ああ、久しぶり、柊君。突然だが、どうすればいいと思う？まあ君のことだ、すでにどうすれば最善かも考えていることだろう。」

「当然です。と言いたいところだが、俺としては如何せん。そんな簡単に最善を考えられるのなら、楽だ。一体どうするべきかと、思案する。度々ヲ級を見ている。可愛い。なんかもう、こけそうになったり、俺と目が会うたびに目を反らす。」

「… ああ、そうか。最初からそうすれば良かったんだ。」

「ヲ級、俺は双方に停戦を協議する。もしそれに応じないのであれば、双方を潰す。それがたとえ元帥でも、君たちでも」

「わかった。」

「ちよ、ちよつと待ってくれ」

「どうしたかと、訪ねると、

「君は、こちらに攻撃を仕掛けてないだろうか？」

「直接的にはそうですね。ですがうちには、深海棲艦が何人もいるのです。つまり、間接的に接敵、また開戦をしています。なので、停戦です。」

なるほどそうきたか、という顔をしている。

「会合を行います。日時は、今週の土曜日、ヒトマルマルマル10:00。遅刻すれば即刻攻め落とします。片方が遅刻しても、どちらも攻め落とします。いいですね。」

「… わかった。それでお願いしよう。ありがとう、柊君。」

「それがりゅーの言う最善なら、それでいい。もう伝達しました。」

「… 深海棲艦のコミュニケーション網は一体どうなっているんだ…」

「では柊君。また土曜日に。」

元帥は、軽いお辞儀を… と思ったが、大分深いお辞儀をしている。俺も深く礼をしなければ… いや、敬礼にしておくか。お辞儀を終えたら扉をあけて、部屋を出ていった。

「…」

「… ?今、何て言ったんだ…」

「…りゅー。土曜日って、何回日が落ちたとき？今日から。」

「…三回だ。深海棲艦には、時間の概念が薄いのか？」

少しだけ。といったあと、俺の手を取って、顔に擦り付けていた。

「…なにしてるの？」

「…もう少しで、お別れ。だから、その前に、少しだけ。」

…ペットだな。可愛い。

さて。俺は今から、探すもの探さないとな。

というわけで、モーレイ海まで来ました。魔力の流れは…あつちに収束してるな。ていうか、魔力で構成されてるのか…ふーん。へー。はー…こりやたまげた。浮いてる…深海棲艦群がってる…いこうか。

「…！」

やっべ見つかつた！皆こつちみてるし来てる！でも、視覚情報は少ないはずだ。よし、

「アスールレイル！」

俺からみて、右の向こうの方へ魔力を纏つた電磁砲を放つ。かなり大きな衝動と音を作つたので、そちらへ、向かうはずだ。

「…！！」

…よし。今のうちにオーブを俺の魔力貯蔵庫ストレージに仕舞おう。

「…なんだこれ。純正の魔力の結晶じゃねえか。これは…自然発生では生まれないな…」

取り敢えず、ただちにオーブの魔力を回収する。魔力で形作られるんだから、あとで作れるだろう。

でもおかしい。こいつには属性が付与されてる。これを作る魔法使いはかなり限定される。魔力を自身で作成、保有できる人物でなければこれは作れない…ま、後でわかることだろう。少なくとも今考えることではない。

「重た…魔力酔いしそう…でも、回収は終わったし、戻るか。」

〳〵天龍side〳〵

… 何故だろうか。最近すごく、ムカついている。いや、ムカつきではないのかもしれないが、これが何かオレにはわからない。どうすればなくなるのかもわからない。ただ単純に、ムカムカする。まあ、邪魔でもないし、このまま、いいか。

「あ、天龍。少しいい？紅茶とマカロンを頂こうと思っていたんだ。一緒にどうだい？」

「… ああ、じゃあ、ありがたくもらうぜ！」

ああそうだ。これでいいんだ。気づかないままで。気づいたとしても、私はこれを、放っておこう。そうでないと、いずれ来るであろう別れが、辛くなってしまうから。彼は、ただ、気まぐれにこの場所に来て、気まぐれに元の場所に戻るから。言われてはないけど、そんな気がしてまもらない。

… こんなに考え込むのは、私… オレらしくないな！

## 第11話

### 第二十話くあるべき姿く

ついにこの日だ。陸側と海側の、対談の日。まあ、俺がこの場を作ったと言っても問題はないが。しかし、俺としては、早く終わらせたいので、予定より早く来てほしい。ま、無理なことだとはわかっている。

今は朝の五時だ。ふむ、ご飯でも作るか…ん？

「あら？提督、どうかしましたか？まだ寝ていらしてもいいんですよ？」

「…いや、大丈夫だよ鳳翔さん。それより、なにか手伝えることはないかな？」

朝の鳳翔さんは、なんかこう…母性があるのに、可愛く見える。普段から可愛いけど。

割烹着にポニテ…最高じゃねーか…

「？私の顔に何かついてますか？」

「いや、可愛いと思つて、見惚れてました。」

鳳翔さんは、顔を赤くして体をじやつかんくねらせていた。どうやら照れているようだ。く、可愛すぎかよ！

…改めて考えてみれば、この世界に来てよかった。おそらくこれからも、他の世界に行くことになるだろう。それでも、最初に来た世界がここでよかった。自分の好きな作品の中にいるなんて、考えてもみなかった。

だが俺は、あくまで違う世界の住人だ。いつかは帰る。それは仕方がない。名残惜しいけど、ね。

「あ、そうだ、提督。今日の朝ごはんはおにぎりにしようと思います。なので、握っていただけますか？」

「分かりました。任せてください。」

…もう炊き終わってたんだな、ご飯。

〈戦艦棲姫 side〉

先日、ヲ級から宣言が下された。今週の土曜日、つまり今日。人間側と深海棲艦側での対談を行う。遅刻は片方がすれば世界が終わるといった内容だった。私としては、世界が終わろうがどうでもいい。それもまた世界の在り方だ。

…と、前までなら思えただろう。でも今は、まだ世界を見ていたい。この世界で生きていたい。だって、彼が教えてくれた。世界は自分が見ているものがすべてではないと。まだ、知らないものがそこら中にあふれていると。それを、彼自身が証明してくれた。だって、彼は、他の人間とは決定的に違う価値観を持っている。こんな私にも、優しくしてくれた。だからこそ、今回の決断の結果も、彼に委ねよう、そう思える。

「… ねえ、カオル。これから、どうなるかしら。」

「知らないわ。それは神のみぞ… いえ、彼のみぞ知る、ね。」

それもそう。今回の会合も、彼がとりつけたものだった。私たちは自衛をするにも負けの者が多く、だんだんとジリ貧のような状況になっている。こちら側が完全に降伏せざるを得ない状態になる前に、こうなってよかった。

「… ヲ級の気持ちも、わかるかも。」

「何か言った?」

「いいえ。少しづつでも世界はよくなっていると思える日が、すぐそこに来てるのね。」

〈??? side〉

私は決断を下さなければならぬ。どうすればより良いものになるのか。このまま向こうへ出向かず、世界を破滅の一途に向かわせることも視野に入れよう。向こうへ赴き、奇襲による蹂躪をも視野に入れよう。

しかし。

しかしだ。問題は別にある。答えをどうしようと、一端末である航空母型模造ヲ級2313145番の言うことを信じれば、私が反旗を翻す時点で、私が終わるだろう。そうやすやすと世界を終わらすというからには、それなりに実力があるとみていい。ならば、下手に出ればまずい。おとなしく出向こう。だが、我々が不利になるような条件であれば、問答無用で異議をたてよう。恐れてはならない、あいてにこちらの弱みをみせてはならない、すこしでも対等、あるいはこちらが上であるとおもわせるよう、毅然とした態度で。

「…で、いつ行くんですか。総司令。」

「あわてるな。もう行くこうと思つていたところだ。」

く元帥side)

約束の時間まで、およそ二時間といったところか。そろそろ準備をしなくてはならないな。

… それにしても。彼にはいろいろと世話になってしまった。この年にして子供に面倒を見てもらうのは、なんとも情けなく感じてしまう。

だが、助けられていたのも確かなことだ。感謝するほかない。

私の手もとどかない鎮守府での活躍も、今回のことも。すべて彼が解決しようとしている。私も、すこしは役に立てることをと資材を優遇したが、それだけでは足りないくらい働いてもらえた。彼は、歳に似つかわしくないほど聡明だ。私ではできないことも思いつく。

… 彼もまた、才あるものだったのだろう。

「…さて。そろそろ行くこうか。」

彼の出した最初の条件は… まあ、厳密には条件としては出されていないので、私の勝手な解釈である。

それは、時間を守れ、というものだ。なにをするにしても、このくらい守れなくては話し合うつもりはない、ということだろう。

だから、どちらかが遅れた時点で、双方がつぶれる、なんていった

んだろう。まさか本気で言うわけが…

さて。彼が今までこのような冗談を言ったことがあるだろうか。それは否だ。つまり、本気かもしれない。

… 早急に行くことにしよう。悠長にお茶を飲んでる場合ではなかった。

↳ 柊 side ↵

「… 双方、遅刻なしに到着できたようでは何よりです。」

現在の時刻は09:30。つまり時間まで余裕すらある。よほどあの脅しが効いたのだろうか。

… 俺としては、もう少し遅く来ると、具体的には一分前に来ると思っていたんだが。だから、お茶を今から入れようと思う。

茶葉茶葉… 混ぜたろ。

ところで、ここにいる三人… 元帥一人と深海棲艦側二人を、俺がこの空間から出て残した時、元帥が殺されてしまう気がする。誰か人を呼ぼうにも、部屋を下手に出ることができない。

「… ところで元帥。なんで一人で来たんすか。」

「いや、必要ないかなあと…」

俺が守るとでも思ってるんですか？まあ、守るんですが。そんなことが起きると思えないので、しりません。

「… なあ、小さきものよ。名は？」

「誰がチビだ？」

軽く魔力を外に出して威圧を与えるようにしたら、先程まで堂々とした態度の深海棲艦は、ヒツ、と少し驚かれた。

「… ごめん。そこまでビビると思わなかった。柊龍夜だ。そちらの代表はあなただろうか。」

「あ、え、その… いかにも。私が海を統べるもの。しかしすまない。私に固体名はない。呼びたいように呼んでくれ。」

「わかったよチビ。」

悪かった。俺が悪かったから涙目にならないでくれ。



もう一人の方にも、軽く目配せと会釈をする。向こうはこちらにすっかりと体を向けなおし、座りながらも深い礼と、キレイな笑顔を見せてくれた。俺は思わず魅入ってしまう惚れそう。

「…じゃあ、ミル。奥の彼女はイルと呼ばせてもらうね。」

理由は特に考えていない。今浮かんだ言葉を適当に切り離したり貼り付けたりしたただけだ。

さてと。

本日の本題だ。が。俺は実は深く考えていない。どうすれば双方に不利益をもたらすことなく、停戦。もとい共生ができるのか。俺的には、二組に任せたい。俺はこの世界の住民ではない。だからこそ。

「俺は二組の意見をまとめ、良いものにする。それ以外は干渉する気もない。では、話し合いを始めてください。」

…元帥、ミル。二人とも「君は何を言ってるんだ？」といった顔でこちらを見ないでくれ。

「…初めまして、と断りを入れるべきだろうか。ミル殿。」

「人同士でのあいさつの礼儀がそれなら、私も言おう。初めまして、元帥とやら。」

なんで目線で殺そうとしあうんですか…

もう少しまとまな会話をしていただきたいが。

敵同士だし無理もないな！

「まあ、考えはありますけどね！」

「二なら最初から言え！」

oh… 実は仲いいだろう二人とも。

とまあ、言われてしまっっては考えを伝えなければならぬだろう。深くは考えていないが浅き考えはある。その問題を、さらに掘り下げて解釈、また答えを出す。それはいまからでも間に合うだろう。

そのまえに、この世界の現状について振り返っておこう。

皆が知っているように、この世界では艦娘を使って戦う人間側と、おそらく自力で戦う深海側。なぜ争うのか。これがわからないこと一つ目。そして、互いにつぶしあい、いつそれが終わるのか。あれ？

分からないことって一つしかないか… まあいい！

「とりあえず、お互いがなぜ争うのか、教えてもらえますか？」

まず元帥の言い分はこれだ。

深海側が、領土に踏み入り、人々に混乱の渦を落とした。

ミルの言い分はこうだ。

人間側が、領土に踏み入り、深海側を無意味に攻撃した。

「どっちも、勘違いだろ…。」

「なんだとっ!!」

なぜ二人とも怒り気味なんだよ…

とにかく、お互いが同じ被害を受けたと証言したなら、それはどち  
らかに情報の齟齬がある。

「ミル。それは君が見たのか？」

ミルはうなづく。つまり。

「元帥。それは上に報告されたんじゃないか。」

そうだ、という。

だったらキレル相手は決まってる。と、そのまえに。

「ほらお前ら。握手しろ。」

二人ともきよとんとしている。そして、お前はなにを言ってるんだ  
という顔をする。

まあ、それもそうか。昨日の今日まで敵だったのに、いきなり仲良  
くしろと言われたんだもんな。

でも、ターゲットは同じ目的も同じ。

「なら、組むしかないだろ？」

「待ってくれ。私はまだ目的を告げていない。」

「それはこちらとて同じことよ。のう小さき… 柊とやらよ。なぜそ  
んなことを申す。」

俺は少し、目配せをする。相手はもちろん…

「提督。少しは役に立てたかしら。」

「最高。まじ可愛いし心読めるしもう最高。お茶も美味しくなってるのなんで？茶葉滅茶苦茶にしたのに。」

「ヲ級は、親指を思い切り点へ突き立てたポーズをとる。無表情なのにこれは・・・可愛い！」

ほんの少し、すこーーしだけ心読みましたありがとうございます。たごめんさい。

・・・そのおかげで、二人の目的が双方のすれ違いから、一つの矢印となったのがわかった。

二人とも、誰が仕組んだのかわからない戦争に、終止符を打とうとしていた。俺はそこに加わるわけにもいかないし、なにかできるわけでもない。

「さて。俺ができるのはここまで。この世界の話は、この世界の住民がしないとな。」

「・・・よろしく。」

うんうん、これでいい。さてと、帰る準備でもするかな。

「あ、提督。終わりましたか？」

大淀か。丁度いいタイミングだな。

「よほどよ。俺帰るから、あとのことよろしく。」

「あ、はい・・・え？ああ、そういう・・・だからか・・・」

なんかぶつぶつ言ってる・・・なにがだからなのか・・・

「提督、まだお時間、よろしいですか？」

こりやたまげた。ずらりと目の前に並んだ料理をみて一つ。このただっ広い場所で皆が俺を笑顔で見つめるのにまたひとつ。こりやたまげるよな。

・・・どうしてこんなことになっているのか聞いたら、天龍が俺のために考えたそう。当の本人は俺が見たとたん他の場所へ目線をやっていたが。

そうか。天龍はわかっていたんだな、俺が帰ることを。そうか。天

龍は知っていたんだな。俺がどのタイミングで帰るかを。

目の前の壮観な風景（ほとんど豪華なご飯）を作り出したのは、鳳翔さんと妖精さんが主体だった。飾りつけはほかのみんなで行ったらしい。この規模を隠していたなんて、相当すごいな。俺は全然気づかなかった。

「えっと… ありがとう、皆。」

これどうしろってんだまったく！

うまかったです。ご馳走様でした鳳翔さん。

心で思うだけじゃダメだと思うから、

「うまかったです。ご馳走様でした鳳翔さん。」

ちゃんと伝えました。

… 鳳翔の微笑みは、柔らかい。この世全ての悪を浄化してくれそうなほど。この笑顔を毎日見れる人は幸せだろうな… 羨ましい。

「提督。本当に、元の世界… に、帰られるのでしょうか。」

俺はうなづく。だって、俺はこの世界の住民ではない。それに、まだすることはある。

… さみしいけれど、俺は帰らなければならない。

「… すみません、困らせてしまいましたね。あの、提督、これを。」

包丁… 包丁!?

「… これは、君が愛用しているものじゃないか。受け取れない。」

「… 提督。これは… プレゼントです。受け取ってください。それとも、私からは受け取れませんか？」

そんなことを言われてしまつては、断れない。なぜそんなにも悲しそうな顔が似合うのか… 鳳翔さんにはもっと、笑っていてほしかった。

… こんなこと、13歳の俺が言うことでもないか。

「… 大事に使わせてもらうよ。」

鳳翔さんの顔はたちまち明るくなる。そうそう、そうやって笑っていられる世界に、していつてくれよ。

もうすぐで落ちてしまうのではという心配をしそうなほど、棧橋のふちに儂く佇んでいるのは、俺のもとに最初からいて、ずっと支えてくれていた、天龍だった。

ほっておけば涙も落ちそうな彼女の横顔は、覚悟を決めようと踏ん張っていた。話しかけるには勇気がいるので、そっとしておこうと思っただが、こちらの気配に気づいたらしく、少し目をぬぐう動作をしたのち、

「よう提督。どうだった？今日のサプライズは。」

「とても美味しかったし、楽しかった。ありがとう天龍。」

よせやい、なんて言いながら恥ずかしそうにそっぽを向く。この動作はかわいらしいが、少し悲しそうにされては、それどころではない。

「…天龍。俺がいなくなったあと、ここに誰かが配属されるか、君たちが異動になるかのどちらかだ。もしそのときに、つらいことがあったら、俺に言ってくれ。」

「…なにいつてんだよ。帰るくせに。」

はは、違う。俺はこの世界から帰れば干渉することはできなくなる。つまり。

「…俺は傍観することもない。この世界は、ある意味剪定される世界だからな。」

「剪定…？」

「いや、なんでもないよ。」

不思議そうに、そして怪訝そうに俺の顔を覗かれても、詳しくは話さねえよ。だって…悲しいじゃないか。

この世界はもとの世界から完全に切り離されていて、しばらくすれば記憶なんて一つも残らないなんて。

「…なあ提督。どうして、この世界？に来たんだ？」

「…そうだな。キャラ…みんなが可愛かったからかな。本当はもう少しいたかったし、もっといろんな人に出会いたかったけどね。」

「なら」

「だめだよ、それ以上は。」

俺は、天龍が言う言葉がわかる。だからこそ、途中で止めなければならぬ。

…だって、言われてしまえば決意が揺らいでしまう。

「俺は、俺のすることがある。だから、この世界の後のことは、君たちに任せるよ。」

天龍はしばらくうつむいたまま、俺の手を握っていた。少したつて、嗚咽が聞こえてくる。手を握る力は、次第に強くなる。この娘もまた、一人の少女だ。別れを悲しむのも仕方がない。俺だって、つらいけれど。

「天龍。今までありがとう。」

この言葉を聞き、少女は目を上げ「ただし俺の方が身長は低いから視線は下向きであるが―俺に向かって

「当たり前だろ、この、馬鹿提督め。」

と。笑って言うてくれた。

… 本当に、ありがとう、天龍。さようなら。

次の日のあさ、俺は皆に黙って鎮守府を出た。誰かに見られて引き止められるなんて嫌だったから。

そして、この世界で最初にいた場所… 元帥を見つけた場所に俺は向かう。

「… ここのはず… あ、あれか。」

よく目を凝らせばそこに、魔法陣が置いてあった。恐らく魔力を込めれば発動し、元の世界へ帰れる。

がしかし。先ほどから。いや昨日からずっと視線を感じる。恐らくこの世界の者ではない。

「俺の邪魔しようつてのか。そこにいる除き魔。」

と声をかけると、そこにいきなり現れた。いやはや、この程度の隠密魔法で尾行なんて、三流も甚だしい。

「お前は誰だ。」

「魔法統括管理塔のBクラス職員、とでもいえば、わかるかな？」

なんだBクラスか… おっと、魔法統括管理塔について説明をしなければ… いや、元の世界に戻ってからでいいか。

「Bクラスごときが、俺に用が？」

相手は分かりやすくむっとした顔を向ける。そしてこちらになにかしらの魔法陣を展開していた。

「貴様が現在所持しているもの、それは一般人が保持している代物ではない。ただちにこちらに渡せ。」

「嫌だ、と言ったら？」

バン。と。空気が破裂するような音とともに眼前に魔法が飛ぶ。首をずらしそれをよけるが、相手はまだ展開を続けていた。なるほど、この程度の芸当はできるぐらいなのか、Bクラスは。

「おいおい、管理塔の職員が、法律破りかよ。笑えないな。」

魔法を使う際は詠唱をしなければそれこそ、バツ貫つちまうぜ。

「… もう一度言おう。オーブを、よこせ。」

「嫌だね。」

今度は無数の魔法が飛んでくる。俺はまず、この周りに被害が出ないように結界を張り、周りから見えないように術を施した。飛んでくる魔法に対し防御壁の陣を展開するが、相手は曲がりなりにもそれなりの実力者だろう。回り込むように魔法が飛んできた。

… なるほど、ホーミング効果のついた氷弾か。

「クラレス。」

俺はちやんと詠唱してから魔法を発動する。ワーオレッツテエライナー。

… あいつはどうやら、同じ魔法を使われると思っていなかったのか、間の抜けた、バツの悪そうな顔をする。

そこまでおかしくないだろうに。

「この… 俺と同等、いや、それ以上の一般人か… ?ありえない。さっさと始末してくれ。」

「まったく、意味が分からねえ。自分より強いと思いつつながら、挑むか？」

まあそこは、年下には負けられんということだろう。それはそれで

むかつくが。

「ま、思い知らせるしかないかもね。形態トランス「狂人化」バーサーカー」

「なに？魔力の質が変化した、だと？」

「当たり前だ馬鹿が。俺は今、狂人だぜ？質が変わってもおかしくねえわ。」

「いきなり決めに行くのは好きじゃねえが、さっさと帰りてえからな……物事は単純な方がいいのさ、生命体と言うのは、そういうものだよ。さて、仕上げと行こうか。死をも穿て。『死ダイの根底ボルグを知るものよ』」

と。槍が当たる前に男は逃げやがった。逃走用の陣は、常に展開していたのだろう。いまはこれでいいか。

さて、俺も帰ろう。帰るために魔法陣に手を向け、魔力を流す。

「……ありがとう皆。うまくやってくれ。」

私の仕事は、変わらない。この世に生きる皆のために、正義を貫く。昨日まで敵だと思っていた対象は、我々の洗脳ともいえる状態が終わった今、志を同じくする仲間である。明日を夢に見て、さらなる発展を求めて、正義を、仁義を持っている。

……こうなれたのも、あの少年……少年？そんなものが、私の周りに姿を現したことはあつただろうか。いや、記憶がどうもうまく機能していない。どうやら私は、疲れているようだ。間違つた記憶を思い出してしまうほどには。

だが。心に穴がある気もしている。だれか覚えていない少年に、たくさんのことを教わった気がする。しかし、本当にいただろうか。私より聡明な少年が。そもそも、十五にも満たない少年が、世界を変えようとする事ができるはずがない……いや、いたのかもしれないな。だが、それはもはやどうでもいい。今私に必要なのは、もつと、世



界をよくしていくことだ。争いが起きない、平和な。私一人では臨めないが、私には仲間がいる。大丈夫と、彼が…彼？